

第七章 文献調査

1. 田原坂の戦いの状況

熊本城救援を急ぐ政府軍が、南関、高瀬から熊本城を目指すには主要道が3本ある。1本が吉次峠を通る吉次往還、1本は山鹿口の豊前街道本道、もう一つが田原坂を通る豊前街道高瀬道（三池往還）である。田原坂越えは、吉次峠越えに比べて高低差が少なく道幅も広いので、多くの兵員や食料などを運ぶには最適のルートであった。高瀬の戦いで、攻守が逆転した薩摩軍はこの守るに易く、攻めるに難い緊要の地の田原坂に拠って、政府軍の南下を阻止しようとして17日間にわたる激戦が繰り広げられた。

この戦いの状況は様々な文献に記載がある。これらを基に戦闘の概要を記した後、「田原坂戦記」『征西戦記稿』と「第五大区九小区各村戦地景況輯録豊岡村」『歴史のはざまに』を引用、翻刻し、戦いの具体像を明らかにする。その後、両軍の豊岡台地などにおける戦いを日付毎に対比して示し、戦死者数によって戦闘規模と場所を推定する。引用等にあたっては適宜改行し、()で註を加えるなどした。

a. 戦闘の概要

3月4日 曇午後雨 政府軍第1次総攻撃。田原坂本道北側の岡林や谷、南側の水本、舟底などで激戦、正面攻撃失敗。右翼隊二俣に進出占領。吉次峠、山鹿口でも大激戦。

5日 雨 政府軍は木葉本営で6日よりの攻撃部署協議、戦法を変じ薩摩軍左翼を突くために一隊を編制。薩摩軍は中久保から谷を隔てて砲戦。一部は迎原に集合、北方平原村、鈴麦村の政府軍に備える。

6日 晴 政府軍第2次総攻撃。吉次峠攻撃中止。政府軍は目標を田原坂が通る豊岡台地に集中する。左翼（熊野座神社方面）、正面（境木口・田原坂本道方面）、右翼（二俣口、中久保、立花木方面）から攻撃、砲戦したが不成功。狙撃隊を組み、薩摩軍抜刀隊に備えた。

7日 晴 政府軍第3次総攻撃。増員。主攻方向を右翼に変更。狙撃隊と砲兵隊の支援を受け中久保、立花木、七本、轟などの豊岡台地南部の薩摩軍陣地を奪取したが、反撃により台地下に後退。

8日 晴 政府軍は昨日の部署で攻撃したが進展せず。多くの将校が薩摩軍に狙撃された。本道北方の北平や宮ノ前で戦闘、宮山（熊野座神社付近）争奪戦。本村熊野座神社兵火。

9日 雨 政府軍は従前の部署で攻撃。横平山の重要性が判明し、この後、横平山の争奪戦が連日行われる。二俣と中久保で谷越えの砲戦（～10日）、政府軍砲壘に薩摩軍抜刀攻撃。

10日 午後雨 休戦。連日の戦闘で疲労が甚だしいため。

11日 快晴 政府軍第4次総攻撃。横平山、二俣口、田原坂本道の三正面に攻撃。二俣正面の中久保、立花木方面は砲8門で攻撃したが効果は薄い。政府軍兵員の損耗が大きく、後続部隊要請打電。

12日 曇晴 政府軍田原坂本道、二俣口で砲撃。進撃せず、守戦内にて交戦し、ほぼ休戦状態。二俣方面で陣地数箇所を薩摩軍が奪う。薩摩軍の古閑山（長窪山）壘は高く堅固で政府軍抜けず撤退。薩摩軍は砲撃激しい中久保を棄て、宿に陣営を移す。山鹿口第3次戦。

13日 雨 昨日に続き、田原坂本道、二俣口、横平山方面の砲戦、進撃せず守戦内警備。薩摩軍も進まず。政府軍は警視隊から百名を選び抜刀隊を編成。薩摩軍も貴島隊など援軍が熊本に到着。

14日 晴 政府軍の警視抜刀隊初陣、この日以降活躍。二俣口の中久保、立花木方面にて開戦以来最大の激戦。二俣正面より砲隊の支援射撃を受け抜刀隊を加えて、七本柿木台場一帯の薩摩軍陣地を攻撃し、一時陣地を奪取したが反撃され、後続部隊がなく撤退。田原坂本道方面の戦闘続く。

15日 晴 横平山争奪戦、特に惨状。薩摩軍は横平山政府軍陣地を白刃攻撃、政府軍敗退。警視隊抜刀隊の功大きく午後4時頃奪回。開戦以来第一の激戦。立花木方面砲戦、宮山（熊野座神社付近）争奪戦。熊本城の囲みを急ぎ解かんとするは天下大勢の関する所たればなり。山鹿口第4次戦。

16日 晴 休戦。前日の激戦で政府軍の混乱が著しいため。田原坂本道北側の谷、栗木平、宮ノ原付

近及び二俣口方面で砲撃、銃戦。薩摩軍も敢えて出ず。

17日 晴 政府軍第5次総攻撃。重点を田原本道攻撃に指向し、砲隊の支援を受け攻撃。二俣口警視抜刀隊攻撃。薩摩軍は陣地を連珠のように築き拒守する。二俣より舟底を助攻。軍人、軍属の俸給増給。

18日 晴 政府軍は正面田原坂本道を攻撃したが進展せず。薩摩軍へ熊本隊の救援。田原坂本道北側の岡林、谷、北平、南側の水本などで戦闘。地雷あり。砲声は雷轟の如く、電光の飛ぶが如し。

19日 晴曇 休戦。政府軍木葉で軍議、翌日からの攻撃部署を決定。別動第2旅団日奈久上陸。

20日 大雨 政府軍第6次総攻撃。政府軍は吉次峠を陽攻。二俣の政府軍は午前5時出発し、6時諸隊一斉に攻撃を開始。右翼隊は赤尾、立花木、七本柿木台場の薩摩軍（高鍋隊）陣地を撃破。北方の田原坂本道方面へ進む。左翼隊は薩摩軍本道守備の背後の田原本村、宮の前などに回り込み、薩摩軍は潰走。午前10時、田原坂、ついに陥落。次いで轟へ進軍、先鋒の隊は11頃植木に進出する。しかし、向坂で薩摩軍の逆襲にあい政府軍は潰乱、植木に引いた。

田原坂陥落後の荻迫・木留付近の戦闘概要

21日 晴 植木進出の政府軍と陣地争奪戦。原倉方面では政府軍が小規模攻勢。山鹿口第5次戦。

22日 晴 植木の政府軍は当面の薩摩軍を攻撃するが、反撃されて撤退。田原坂の軍用電線復旧。

23日 雨曇 政府軍は植木・向坂方面の本道攻撃隊と木留攻撃隊に分かれて、午前6時に総攻撃を開始、薩摩軍が激しく反撃。雨が多く、道路はぬかるみばかりで歩行困難。政府軍は田原坂を突破すれば、熊本城連絡は苦もないと考えていたが、再び陣地戦の状態となり第二の田原坂戦開始。

24日 雨 政府軍は滴水、轟の二方向から木留、円台寺方面を攻撃、放火。一時は占領したが薩摩軍の逆襲を受け撃退される。政府軍の食料は十分にある。士官学校生徒と教導団生徒が士官見習と下士になって、欠員を補充した。

25日 晴 明け方、政府軍は滴水から木留の薩摩軍に攻撃を開始したが、霧を利用して出撃した薩摩伏兵の反撃にあい、23日の守備線まで押し返される。薩摩軍の勢いは極めて激烈。このため野津大佐は急ぎよ七本から救援2個中隊をよび、轟から薩摩軍左翼に向かい攻撃させたので勢いを盛り返した。

26日 曇 政府軍は昨日の失地を回復。攻撃目標を薩摩軍の本営がある木留に絞り果敢に攻撃するも、目的を達することはできなかった。カステラ支給、甘美。

27日 晴 気候冷寒、対峙距離が接近し互いに舌戦し、狙撃される者がいた。木留、吉次峠も抜けず。第2旅団近衛兵が荻迫薩摩軍を急襲して占領。高月官軍墓地の余地なく、新たに宇蘇浦に埋葬開始。

28日 晴 寒威尚厳、政府軍諸隊は各々当面の薩摩軍を攻撃したが敗退する。薩摩軍、山谷に出没して攻撃。銃弾飛注して雨霰の如し。政府軍は士官に下着を給した。

29日 晴 気候暖和、休戦状態。薩摩軍は岩野方面より植木の背後を襲撃したが、政府軍に要撃され野々島方面に後退。山鹿方面の第3旅団は戦闘少なし。

30日 雨 政府軍は原倉口の兵を増員して、薩摩軍熊本隊が守る三ノ岳方面を攻撃するが、成果上らず撤兵した。雨甚し。植木口の前線は両軍の陣地が近接しており、互いに話ができ、物を投げ合うことができるほどの近さであった。

31日 雨午後晴 休戦。政府軍では軍議が行われ、半高山を占領し吉次峠を奪い木留に進入する計画が立てられる。兵卒にパンを支給する案が出されたが、口慣れていないなどの理由で却下。

4月1日 晴 政府軍は立岩と横平山から挟撃し、薩摩軍は半高山が敗れ立岩等からの攻撃で上古閑、熊本隊守備の吉次峠も奪われた。三ノ岳に陣を移すが、半高山から攻撃されついに撤退。政府軍は木留に進出。現在の菱形小学校付近に政府軍砲壘があり、その南側で小戦闘があった。

2日 大雨 政府軍は木留の薩摩軍を攻撃、放火、占領。集落大火。薩摩軍は南の辺田野に後退。木葉高月の墓地が人目につくので、七本に新たに墓地を開くこととする。戦場に散乱する武器弾薬を拾い集め

た者にこれを買上げることを布告。

3日 晴 休戦、防備強化。政府軍は弾薬分配や命令伝達、定例会議などの方針を定めた。また、兵卒10人毎にローストビーフ1缶を支給した。

4日 晴 休戦、警備強化。桜花爛漫。

5日 晴 政府軍、軍議。緊要の地の田原坂と吉次峠は抑えたけれども、いまだ熊本城と通ぜず。荻迫を突破して、一気に熊本城に進出する計画を立てる。

6日 晴 霧深し。政府軍の荻迫第1次総攻撃、警視隊も含め兵力約4600人。明け方より荻迫柿木台場一帯で大激戦（植木町山頭遺跡）、薩摩軍は氣勢激烈、縦横無尽の攻撃で政府軍を退けた。辺田野でも同様。熊本城に運ぶ予定だった大量の糧米は、轟にて保管。

7日 雨 休戦。辺田野付近での小戦闘。

8日 曇のち雨 政府軍荻迫第2次総攻撃。荻迫柿木台場一帯大激戦（植木町山頭遺跡）、政府軍台場確保。両軍陣地は近く距離は10mほど。この日の死傷者288名、消費弾薬約55万発。

熊本城籠城中の熊本鎮台突圍隊は、城を出て包圍を突破、宇土の衝背軍との連絡に成功。

9日 雨 薩摩軍は辺田野の戦闘で政府軍を退けた。政府軍に宮中から綿撤糸、ワインなどが届く。

10日 大雨 休戦。政府軍は武器弾薬、兵員の損耗が激しいにもかかわらず、いまだに熊本城と通じることができない。増援部隊を要請。石川付近の戦闘。

11日 晴 休戦。政府軍は攻撃方向を山鹿口に変更、進撃。薩摩軍は東方へ退去。

12日 晴 植木口薩摩軍は滴水政府軍を攻撃。政府軍御船占領。薩摩軍三番大隊長永山弥一郎自刃。

13日 晴 休戦。荻迫で小戦闘。

14日 曇のち雨 植木口で小戦闘。薩摩軍が熊本城の包圍を解く。西郷ら木山へ移動。政府軍は熊本城入城、籠城戦終る。

15日 晴 午後1時頃、薩摩軍は狼煙を上げ、植木方面での守備を解き撤退。城北地域での戦闘終る。

b. 『征西戦記稿』にみる田原坂の戦い

卷六 田原坂戦記

賊、守地去る 賊は已に前日の大敗（二月二十七日、高瀬の戦い）に懲り、夜に乗じて其守地を退けり。我軍乃ち攻襲偵察兵を出し、賊の備未だ整わざるを偵知し兵を二道に分ち、一は木葉より植木に出て、一は伊倉より吉次越を経て小窪に出て進んで熊本に会せんとするの策を定む。

田原坂戦 是に於て山縣参軍は（三月）二日福岡を発し三日南関に赴き、大山少将と同じく兵二中隊を率て高瀬に出づ。時に野津（鎮雄）少将は正に陣頭に在り諸隊を指揮し戦方さに酣なり。既にして我軍又大捷を得、万楽寺等の諸村に在る賊壘を陥れ北ぐるを逐て遂に木葉を取る。賊は退て田原坂に拠れり。

夜に入って忽ち急騎の南関より来るあり。三好（重臣）少将の書を伝う曰く「今朝賊大挙して我岩村口を襲う、我兵力拒殺傷相当」と。須臾にして又来報あり道う「賊殊に猛烈を極め劇戦未だ已まず、速かに多少の援兵を送発せんことを請う」と。乃ち近衛兵二中隊をして赴き救わしむ。俘虜の言に拠れば、賊は全力を此口に集め以て南関を衝くの計策なりと。是日、山鹿口の参謀長福原（和勝）大佐狙撃せらる。後二十日余日遂に死す。

田原坂戦の内 四日、両旅団の兵進んで田原坂の壘を攻む。劇戦奮闘至らざる所なく夜に入って戦い未だ止まず。是日野津（道貫）大佐は本月一日区画する所の部署に従い、兵二大隊半を率て右翼吉次越を経、小窪に赴き正面軍と会し、更に部署を定めて熊本に入らんとす。兵を進めて吉次越に至り劇戦すること終日終夜、遂に賊の一将篠原國幹を殲す。然れども、我兵竟に利少く又我士官の死傷半に過ぎたるを以て、一大隊を原倉村に置き其他の軍は悉く高瀬に退く。

田原坂戦の内 五日、田原坂の戦亦昨日に異ならず、賊は常に丘陵の要所に拠って防戦し、我兵は随って仰攻の勢をなすが故に百方方略を盡し、猛烈の攻撃を行うも其功を奏すること能わず。乃ち戦法を変じ、賊の左翼を突かんがために別に一隊を編制し、午後に至り潜かに左翼に迂回せしめんとせしに、木留口の賊、忽然襲来し此策も亦行われずして止めり。

卷七 田原坂戦記

田原坂戦の二 野津大佐、已に高瀬に退き野津少将と合議し高瀬、原倉、伊倉には厳に守備を設け、全軍は坂門田口より進行し、其左傍山上に一大隊を配擢し以て吉次越の賊を防ぎ、本軍は此より左折し吉次の險を避け吉次と田原との中間なる間道を攀躋し、賊の左腹を突くの策を立て、明六日より之を施行せんことを請う。乃ち其請の如くせしむ。

野津少将も亦以為らく「田原坂前面は無比の要害なれば、守るに易く攻るに難く、到底我兵は勞して功なし」と。因って其右翼の兵を野津大佐の兵に合し、田原坂の右側に出るの策を定め、六日、昧爽三方より田原坂を攻撃し、遂に賊の背後に出づ。賊力拒し壘壁猶固し、我軍又新来の兵を併せて劇しく其前面を衝突せり。是日、吉次越も前日の如く其中央に出て戦を開き、両道殺傷相当れり。

田原坂戦の二 田原口は八日も劇戦し幾んど之を陥るゝ者二たび、然れども賊百四、五十名毎に一群を成し白刃を揮って我軍を衝突す。我軍頗る之が為に苦む、乃ち別軍を以て午後より賊の左翼に迂回し、其三壘を陥れ正面の兵も奮進し賊壘を距る6、7間に迫れども猶お十分の功を奏するに至らざりき。

田原坂戦の二 九日、海軍清輝艦小天村を砲撃す。

十一日、正面軍又暁を冒して横平山正面の二賊壘を取る。而して側面賊兵の攻撃を受け、且つ為めに後を断たるゝの虞あるを以て之を棄つ。是時に於て彼我の位置、実に倏忽瞬息（息をするほどの短い時間）の間に変じ、賊壘を毀ち或は之を改築するの暇なし。亦以て両軍の戦い甚だ急なるを見る可きなり。

卷八 田原坂戦記

両口分配 是時に当り軍略より之を論ずれば、我は力を山鹿口に盡すに田原坂と同等の兵数を以てし、兼松にも適當の兵を出さざるべからざる者の如し。然れども、賊已に全力を田原坂に盡すが故に我も亦力を一方に省かざるを得ざるなり。山縣参軍の初め山鹿口に往て戦略を区画し戦線を巡視する時にも、亦此口の姑く防守を主とするに如かざるを察し、力を防守に専らにせしめ以て時機を待たしむ。其後、田原口の戦、未だ意の如くなる能わざるに因って、乃ち請うて三浦少将をして山鹿方面の司令に専任し、更に進攻の策を立てしむ。

初め野津、三好両少将の各其旅団を率て戦地に達するや、敵已に眼前に在り事甚だ急なるを以て、固より両旅団の區別に拘々たるに違あらず、其當も之を一所に置き二人合一して両旅団の兵を使役し以て攻守を規画し、三浦少将も亦曩に其第三旅団を率て二俣の戦地に向う。

是に於て三旅団の兵は、大抵之を田原口に攢め其内一部を分て之を山鹿口に出せり。大山少将所率の別働隊、後着兵も亦合して田原口に向う。是を以て各旅団の兵、彼此甚だ錯雑せり。是に至って三浦少将を二俣より召還して専ら山鹿口に当らしめ、大山少将をして別働隊司令長官を以て、三好少将銃創療養中、第二旅団司令長官を兼勤せしめ、野津少将と共に田原坂に当らしむ。

是よりして団兵の錯襍も漸次改まり、田原口は第一、第二旅団及び大山少将所率の別働隊を以て攻守し、山鹿口は第三旅団の担任する所となれり。此部署を指定し及び戦略を区画せんが為め、山縣参軍も猶お南関を去る能わざりしに、是に至って略々定まる。乃ち十一日を以て其營を高瀬に進めたり。

十二日午前七時、吉次の賊二手に分れ、一は間道を潜行し白木村を経て木葉を襲わんとす。我軍備あり、襲う能わず、又原倉村に進入せし賊は我守兵の為に逆撃せられて退く。此兵は賊將、貴島清が始て率い来る者なりと云えり。

田原坂險 田原坂の險要なる坂道、隧の如く羊腸崎嶇（曲がりくねった、けわしい山道）守るに易く攻

むるに難きの地勢たり。我軍劇戦昼夜少しも間断なきも、毎に此地形の為めに阻礙せられ遺憾に堪えざる者あり。夫れ賊兵は其総員の内、凡そ二千人を以て衝背軍に当り、又八百人を以て熊本を囲み其余は挙げて正面に向う。就中、私学校党の精鋭敢死なる者を此口に攢め全力を盡し、堅塁を両崖十数所に築けり。其塁たるや尋常胸壁の比に非ず、直に地を鑿って横隧をなし我が進路を遮断し、賊は悉く穴居の状をなし以て固守力戦す。

我軍も亦本月の初より力を此口に盡し日夜攻撃し、尚お数回の迂回兵を用いたれども、彼れ天険に拠り其守り尤も固し。故に**全役を終るまで其死傷の尤も夥きは田原口なり**とす。

十四日にも昧爽より烈しく其側面を撃ち、選ぶ所の**東京巡查百名を以て抜刀隊**を編み、砲銃戦の機に乗じて賊塁に突入せしめ、全兵継で奮進し其数塁を抜き之を毀ち街道に沿って戦い血を躑み屍を踐み、極めて賊塁に接近し兩軍の銃口相触るゝに至り、賊を殺すこと六、七十人、賊為めに膽を摧く。而して正面の塁は尚お依然たり。陥るゝ所の賊塁に就て其死状を察するに、守兵殲くるに至らざれば退かざる者の如し。是に於て其の竟に旗鼓の下に降る者に非ざるを知れり。夜に入って賊、田原正面の哨兵線に襲入す、我兵撃つて之を却く。

十五日、我兵午前六時を期し二俣前面及び横平山を攻撃せんとして部署已に定まる。賊、期に先んじ午前五時亦来て正面及び右翼を襲う。正面は我兵劇戦して之を却け、右翼は遂に横平山上の一塁を失えり。乃ち高瀬屯在の兵三中隊をして急に赴き救わしめ、午後五時直ちに右翼の塁を復せり。食頃にして正面の賊百余名復た白刃を揮って我胸壁に突入す。我軍戦い尤も劇しく遂に賊を殪して幾んど盡るに至る。蓋し**是日の戦は開戦以来第一の劇戦なり**とす。

夫れ田原坂、伊倉、二俣の開戦より昼夜劇闘、既に十余日を経て兩軍の死傷甚だ多、戦の劇烈なる我邦古今の歴史上に在って未だ嘗て見ざる所。蓋し田原坂より熊本に至るまでは丘陵断続し要害甚だ多く、之を守るに必死の賊を以てす。其進取難きや固より言を俟たず、是れ其劇戦此の如くなるに至る所以なり。而して敢て之を顧みるなく大小砲銃を連発し、昼夜烈戦し幾千の勇士剛卒甘んじて其碧血を洒ぎ、屢々中央突貫を行い以て急に熊本城の囲を解かんと期する者は、**熊本の一城天下大勢の関する所**たればなり。

卷九 田原坂戦記

田原坂抜く 斯くて十七、十八両日も正面攻撃を行えども賊敢て一步を退かず。**十九日**、先鋒の諸将相議し将さに明日を以て更に一回の大進撃を試みんとす。

二十日、我軍は大風暴雨を冒し予定の位置に擺布し、右翼吉次越と左翼田原本道は固く守り、右に斜に二俣より中央軍を進め、其前軍は猛烈に突貫し以て後軍を啓き、後軍は縦横奮闘銃撃劍刺し、左右の塁の未だ抜けざるをも顧みず、午前九時直に植木を取り火を放って賊の貯蓄せる弾薬を焼燼し、其の回復の念を絶てり。

尋で左右の賊走る、我軍進で向坂を扼す。賊、銳を盡して植木に迫る、劇戦天明に至る。是に於て植木以北田原坂に至るまで皆我が有に帰したれども、此夜は諸口皆警備を厳にし、諸軍総て露営せり。其艱苦、実に甚し。而して野津、大山両少将は其營を轟村の七本に進む。

卷十 田原坂戦記

山鹿賊走の内 田原坂本道の兵は昨日植木を過ぎ一たび向坂を取りしに、其午後に至り山鹿口より突出したる賊兵の為に烈しく其側面を衝かれ、已むを得ず退て植木に保守す。而して山鹿口の官軍此口に来会せり。是に於て田原口の賊は向坂の陰に拠り、山鹿口の賊は鳥栖、隈府等の地に拠れり。

蓋し、**田原坂の戦は全役中の最大劇戦**にして我勇士を失うこと亦少からず。而して、其尤も憐む可く惜む可きは**別働抜擢狙撃隊**なり。初め山縣参軍の南関に在るや田原、二俣共に数回の劇戦に及べども其陥破し難きを以て、砲工兵の中に就て敢死の士官下士合せて三十二名を選抜し編じて一隊と為し、各自に動作するを許し何れの地方に戦うも敢て問うことなく、唯田原坂の背後に出るを期せしむ。其戦に赴くの前

夜本営に來り悲壯慷慨、死を誓って而して後に發す。後戦う毎に功あり。然れども田原坂の陥る比には三十二名の者死傷して殆んど盡きたり。

其二 田原、山鹿兩路の軍既に進み、本軍は植木に陣して向坂の賊と相對す、之を中央とす。而して右翼は滴水及び原倉より海岸に至り、左翼は味取より山鹿新町に至り蜿蜒（うねうねと続く）屈曲して哨線を連絡すること凡そ十里余に亘れり。此より熊本連絡に至るまで二旬余日間、又一大戦場を現わせり。

其三 是に於て我軍は更に部署を齊整し、**二十三日**は中央植木より右翼木留前面の間に進撃し劇戦終日、而して吉次越殊に烈しく殺傷甚だ多し、日暮るを以て交綏す。**二十四日**も亦向坂及び木留を攻撃し殆んど木留を抜かんとす。**二十五日**は賊大霧に乗じて植木及び木留の我が哨線に突入し、午後八時賊又木留口に來襲す。皆劇戦して之を却く。是日、山縣參軍は營を上木葉に移し進攻の事を処分す。**二十七日**午前十一時、我兵砲撃して木留村の賊營を焼く。**三十日**は総軍進撃を約し、午前三時半より迂回兵を用いて三岳の賊を攻め、半腹以上に至れども道路嶮難且つ賊堅壘を上に乗せ銃丸を雨射し善く拒ぐを以て、我軍は兵を収めて原倉に退けり。

c. 「第五大区九小区各村戦地景況輯録 豊岡村」翻刻（『歴史のはざまに』より、一部改変）

二月二十三日 熊本応援の官軍凡そ 100 人計り、同区轟村の内、字沖野原に於て不意に賊兵と出会い少々発砲、軍の利なきを察せられてか軍を引揚げて、当村田原坂の下、鈴麦村境の川中、或いは同村字百把の高岸に抛り相待つ處、賊兵進んで田原坂を下るとき、待ち設けたる官軍、賊数名を砲殺す。然りと雖も、賊勢益加わり頗る猖獗なり。官軍尚引いて木葉、高瀬へ軍を退らる。因つて茲、賊兵日々往來す。

三月一日 字中久保に賊 200 名程來たり、字舟底、水本、北平、岡林、西原、宮ノ原等に砲台を設ける。

二日 字休居、宮ノ原等へ賊 600 名程來たり。

四日 午前 6 時頃より田原坂にて砲戦。官軍鈴麦村字洲崎より川に沿うて進軍し、豊岡村字岡林、谷等、二手に別れ激戦あり。亦、字西原より官兵進み砲發し、賊の設けたる壘 4 ヶ所を抜いて戦争す。同日、賊兵 300 名程田原字に來たり、数ヶ所に陣屋を設け、同日、字谷、兵火。

官軍、豊岡村の内、字清水の吉川嶋彦、字石垣田の伊形安平宅に近衛兵 300 名余、滞陣。字水本、舟底等にて砲戦、同所兵火。同日午後 6 時頃、字清水に退陣。同日、鈴麦村字洲崎より川を伝い、豊岡村字岡林に進み、賊の設けたる砲壘 4 ヶ所を抜き同所に陣營を設け、田原の登りつめに長さ 20 間余の陣營 3 つ建設、其の上に高き土手有之、大砲を据え付、字田原、上ノ原、宮ノ原、宮ノ前等の賊と日々戦い、又街道の左右に高岸有るに同じ高さに土俵を以て膝立矢狭間を切り、字水本、舟底に有る賊と日々戦争す。

五日 午前 6 時頃、官軍は七大区二俣村へ進み、賊兵は当村字中久保より谷を隔て砲戦し、同日、字迎原に賊 200 名程來たり、平原村、鈴麦村の官兵に向かい守る。

官軍、字清水より午前 6 時頃より字水本、舟底等に進軍中にも舟底字民家の上、賊砲壘と 30 間程を隔て、是より日々砲戦。

六日 田原坂并に上ノ原、中久保一度に砲戦あり。

七日 午後 4 時頃より官軍進撃、内北川より進み双方土手を小楯に取り、1 時間程挑戦し、賊鋸鎗を以て官軍に乱入、17, 8 名を討ち、官軍も賊数名を討ち取る。同日、字田原兵火。

八日 田原神社兵火、同日、官軍字北平に進撃。同日午後 6 時、官軍頻りに進入して、字宮ノ前にて攻撃し、官軍 16, 7 名戦死、賊兵を討つ 8, 9 名。

九日 午前 3 時頃、右砲壘に賊兵大いに呼ばわり抜刀にて 10 間程進み來るに、賊壘より官兵の砲壘の低きこと 10 間余あって、下より打出す砲勢に恐れ進み兼て、賊元の壘に逃げ帰る。賊兵 11, 2 名を殲す。

九日より十日 二俣村より中久保と谷越の砲戦。

十二日 同所兵火。同日、賊兵、官軍の大砲破裂の射撃を恐怖し、中久保より宿に陣營を転ず。

午前6時頃、字清水より舟底川を伝い、字六反田の井手に沿うて進み登り、古閑山字に在る賊を破んと勇奮進撃するに同所の賊壘高く、且堅くして頗りに発砲防御す。終に官軍進み兼、浮足になり井手或いは土手崖を伝い、大いに苦戦して清水字に退陣す。此の戦いに官兵戦死13,4人程。

十三日より十四日 昼夜田原坂并に字上ノ原、水本、舟底に於て激戦。

十五日 字宮ノ前にて午前6時頃官軍進み来るを、賊抜刀にて字宮ノ原より押寄せ1時間程戦い、官兵5,6名戦死、賊兵8,9名を殲す。同日、字田原の民家罹災、同日、字立花木にて砲戦。

官兵、内北川より進み、宮ノ前にて激戦苦戦して賊壘終に不拔、鈴麦村に退陣。

十六日 官兵、字谷より進み字栗ノ木平に進撃するに、宮ノ原より賊押下し下射す。官軍不乱、拔尚退いて石垣田、伊形安平宅に次す。同日、中久保兵火。

十六日より十七日まで 前同断にて。

十七日 亦々同所に官兵攻め登るに、賊亦前日の如く防守す。官兵は二手に別れ、一手は欺いて逃下るを、賊勝に乘じ追い来るを字谷の官軍の伏兵起り、烈しく砲撃す。賊敗して逃げ道を失い左右に潰乱す。官兵大いに砲発して、賊17,8名を殲す。

十八日、十九日 昼夜戦争、砲声無止時、字水本、谷、岡林、北平等にて数十度の戦争、昼夜の砲聲、雷の轟くが如し、電光の飛ぶが如し。十八日、宿兵火。

二十日 午前6時頃、轟村より賊の敗兵乱来たり。同午前7時頃より賊兵不殘當応村を経て植木に逃去す。

轟村、赤尾、立花木の官軍勇戦進撃に回って七本の賊兵敗れ、宿并に休居、田原等の賊壘も一度に潰走す。官軍進んで宿、休居、田原等の民家を放火し、同日午前8時頃、轟村へ進軍。罹災合せて40戸、当村は植木より高瀬への第一の険隘の地形にて、守るに利あつて攻めるに難しき地勢故に、官軍の死傷頗る夥多なり。従つて戦争も亦烈しく、因つて茲人民家財を山林に運搬して兵難を避け、穴居或いは野に起臥し死傷9名、余は辛くして身命を保守するを得たり。

d. 調査地周辺における両軍の戦闘状況の推定 (第25表 小字参考図)

田原坂各調査地における採集・出土遺物や戦闘の具体的様相を理解する等のための一助として、政府軍、薩摩軍の部隊ごとの戦闘日、戦闘地一覧を作成した。作成は参謀本部編纂課『征西戦記稿』を基本とし、薩摩軍については『新編西南戦史』、『薩南血涙史』も加え、国立公文書館アジア歴史資料センター資料も活用した。なお、岡林遺跡は出土遺物が少なく、場所も離れているので今回は除外した。

部隊略称は次のとおり。近歩1連1大1中→近衛歩兵第1連隊第1大隊第1中隊、熊鎮14連1大1中→熊本鎮台歩兵第14連隊第1大隊第1中隊など。

薩1大1小→薩摩軍1番大隊1番小隊、党薩諸隊は熊本1小→熊本隊1番小隊、高鍋1小→高鍋隊1番小隊等とした。



小字参考図 1 / 24,000

第 25 表 調査地周辺における両軍の戦闘状況の推定

調査地 北平古道、田原城跡・田原寺跡、熊野座神社 ⇒ 豊岡台地北部一帯

・小字名 北平、上ノ原、谷、栗ノ木平、田原、宮ノ前、宮ノ原など

調査地 みかん小屋周辺、本道二ノ坂、谷村計介碑、熊本市有地（北）、（南） ⇒ 田原坂本道北側一帯

・小字名 岡林、栗ノ木平、宮ノ原、宮ノ前など

調査地 田原坂公園北半部、田原坂公園南半部、資料館下、舟底遺跡 ⇒ 豊岡台地中央部一帯

・小字名 宮ノ原、水本、舟底、休居、宿、古閑山、中久保、供田、松山など

聞き取り調査のみ ⇒ 豊岡台地南部一帯

・小字名 赤尾、立花木、轟、七本など

3月4日

政府軍		推定戦闘地及び調査地	薩摩軍	
戦闘地等	部隊		部隊	戦闘地等
豊岡村 左側を進む	近歩1連1大1中左小隊	豊岡台地北部一帯 調査地 北平古道 田原城跡・寺跡 熊野座神社	薩4大7小 ⁽⁴⁾	田原坂上の小学校後ろ松山
田原坂 坂左側から邊場山(平原山) ⁽¹⁾ 下を通過して豊岡村へ向かう	近歩1連1大3中		薩5大8小 ⁽⁵⁾ 薩6大1小 薩6大3小 薩6大4小	熊野座神社、宮山 豊岡本村背後の山中 豊岡本村背後の山中 豊岡本村背後の山中
田原坂本道 左方の山谷から進入	熊鎮14連2大2中左小隊			
田原坂本道 左方に向かう	熊鎮14連2大4中			
田原坂本道 豊岡村に向かい山上の薩塁に迫る	熊鎮14連2大4中左小隊			
田原坂 坂道を進む	近歩1連1大2中	田原坂本道北側一帯 調査地 みかん小屋周辺 本道二ノ坂 谷村計介碑 市有地(北) 市有地(南)	薩4大7小	田原本道右翼
二俣より田原坂へ偵察 のち接戦	熊鎮14連2大3中の一部		薩5大1小 薩5大5小	田原本道右翼 田原本道右翼
田原坂本道	熊鎮14連3大3中			
田原坂本道 正面、坂上に迫る	熊鎮14連3大4中 熊鎮14連3大4中1半隊			
田原坂 右側に迂回し豊岡村に至る	近歩1連1大4中	豊岡台地北部一帯		
田原坂 坂傍から横撃、1塁を奪う	近歩1連1大4中右小隊	田原坂本道北側一帯		
田原坂本道 坂上右方の薩塁を攻撃	熊鎮14連3大1中	豊岡台地中央部一帯 調査地 公園北半部 公園南半部 資料館下 舟底遺跡	薩1大8小 薩4大7小 薩5大5小 薩5大8小	田原
田原坂本道 坂上右方高地より進入	熊鎮14連3大2中		薩6大2小 薩6大4小 ⁽⁶⁾ 薩6大6小 ⁽⁶⁾ 薩6大7小 ⁽⁶⁾	
二俣長窪間 谷を挟んで村端で対戦	近歩1連2大2中 ⁽²⁾			

田原坂半腹 敵前 250 m 二俣村	東鎮豫砲 1 大右分隊 ⁽³⁾	豊岡台地北部一帯 田原坂本道北側一帯 豊岡台地中央部一帯 豊岡台地南部一帯	薩砲兵 1 個半隊 ⁽⁷⁾	田原坂守備
			薩 1 大 7 小 薩 2 大 9 小 薩 5 大 9 小 薩 6 大 5 小	田原坂左翼 (七本、轟方面)
		豊岡台地南部一帯	薩 1 大 6 小 薩 6 大 2 小 薩 7 大 11 小 佐土原 1 小 佐土原 2 小 熊本 3 小 ⁽⁸⁾ 熊本 7 小 ⁽⁸⁾ 熊本 9 小 ⁽⁸⁾	七本 七本のち吉次
			薩 4 大 6 小 ⁽⁹⁾	轟村

3 月 5 日

政府軍		推定戦闘地及び 調査地	薩摩軍	
戦闘地等	部隊		部隊	戦闘地等
豊岡村 田原の左より進撃 豊岡村 進入 薩軍左翼の嶮より攻撃	熊鎮 14 連 2 大 4 中 近歩 1 連 1 大 1 中右半隊 ⁽¹⁰⁾	豊岡台地北部一帯 調査地 北平古道 田原城跡・寺跡 熊野座神社	薩 5 大 8 小 ⁽¹²⁾ 薩 5 大 5 小	田原坂北之手松山台場 田原本道右翼
田原坂 田原坂	熊鎮 14 連 3 大 4 中 熊鎮 14 連 3 大 2 中右小隊	田原坂本道北側一帯 調査地 みかん小屋周辺 本道二ノ坂 谷村計介碑 市有地(北) 市有地(南)	薩 5 大 5 小左半隊 薩 5 大 8 小 ⁽¹²⁾	田原本道 田原本道
長窪山麓 長窪山 右方の一高阜	近歩 1 連 1 大 2 中 近歩 1 連 1 大 4 中	豊岡台地中央部一帯 調査地 公園北半部 公園南半部 資料館下 舟底遺跡	薩 1 大 8 小 薩 4 大 7 小 薩 6 大 4 小 薩 6 大 6 小 薩 6 大 7 小 薩 1 大 6 小 ⁽¹³⁾ 薩 4 大 5 小	田原 長窪山麓、右方の一高阜 長窪山
二俣	中央分隊 (東鎮豫砲 1 大) ⁽¹¹⁾	豊岡台地北部一帯 田原坂本道北側一帯 豊岡台地中央部一帯 豊岡台地南部一帯		
		豊岡台地南部一帯	薩 6 大 2 小 薩 7 大 11 小 佐土原 1 小	七本

			佐土原 2 小	
			薩 4 大 6 小	轟村

3月6日

政府軍		推定戦闘地及び調査地	薩摩軍	
戦闘地等	部隊		部隊	戦闘地等
田原口 坂左の谷より進軍、 薩塁 3ヶ所を抜き追撃、一の宮 社に放火し進む 田原坂左翼 田原坂左翼	近歩 1 連 1 大 1 中 ⁽¹⁴⁾ 大鎮 9 連 2 大 3 中 熊鎮 14 連 3 大 1 中 1 分隊	豊岡台地北部一帯 調査地 北平古道 田原城跡・寺跡 熊野座神社	薩 5 大 8 小 ⁽¹⁸⁾	田原坂北之手松山台場
田原口 坂右に出る 田原坂本道 田原坂本道 田原坂本道 田原坂 田原坂 田原坂	近歩 1 連 1 大 3 中 大鎮 9 連 1 大 1 中 大鎮 9 連 1 大 4 中 大鎮 9 連 2 大 1 中 熊鎮 14 連 2 大 2 中 左小隊 選抜銃卒 (14 連 2 大 各中隊) 熊鎮 14 連 3 大 各中隊	田原坂本道北側 一帯 調査地 みかん小屋周辺 本道二ノ坂 谷村計介碑 市有地 (北) 市有地 (南)		
二俣口 長窪山薩塁に迫る (倉の台場…田原坂口横面) 二俣口 舟底山 田原坂右翼 田原坂右翼 田原坂右翼	近歩 1 連 1 大 4 中 ⁽¹⁵⁾ 選抜隊 大鎮 8 連 2 大 1 中 大鎮 8 連 2 大 4 中 大鎮 9 連 2 大 2 中	豊岡台地中央部 一帯 調査地 公園北半部 公園南半部 資料館下 舟底遺跡	薩 1 大 8 小 薩 4 大 7 小 薩 5 大 5 小 薩 5 大 8 小 薩 6 大 4 小 薩 6 大 6 小 薩 6 大 7 小 薩 7 大 11 小 ⁽¹⁹⁾	田原
七本村、轟村 田原坂本道に近づく	近歩 2 連 1 大 1 中 ⁽¹⁶⁾	豊岡台地中央部 一帯 豊岡台地南部一帯		
二俣村	砲兵右分隊 (東鎮豫砲 1 大) ⁽¹⁷⁾	豊岡台地北部一帯 田原坂本道北側 一帯 豊岡台地中央部 一帯 豊岡台地南部一帯		
		豊岡台地南部一帯	薩 1 大 6 小 薩 6 大 2 小 薩 7 大 11 小 佐土原 1 小 佐土原 2 小	七本
			薩 4 大 6 小	轟村

3月7日

政府軍		推定戦闘地及び調査地	薩摩軍	
戦闘地等	部隊		部隊	戦闘地等
田原坂本道 左側山上の薩壘に迫る 田原坂本道 鉢割坂及びその右に進む 田原坂本道 北山から豊岡村に深入 小畑村に向かう 小畑村に向かう 小畑村に向かう	大鎮9連2大1中 大鎮9連2大2中 大鎮9連2大3中 近歩1連1大3中 広鎮11連1大3中 広鎮11連1大4中	豊岡台地北部一帯 調査地 北平古道 田原城跡・寺跡 熊野座神社	薩5大8小 ⁽²³⁾	熊野座神社(宮山)、 小松山台場(北手松山 台場)
田原坂本道 田原坂本道 林叢間潜進、路左右に進む 田原坂 坂上劇戦に応援 田原坂	近歩1連1大1中 別働狙撃2小、3小 熊鎮14連3大4中 熊鎮14連3大1中	田原坂本道北側 一帯 調査地 みかん小屋周辺 本道二ノ坂 谷村計介碑 市有地(北) 市有地(南)	薩2大7小 薩4大7小 薩5大8小 ⁽²³⁾ 薩7大11小	田原本道 田原本道 田原本道 田原本道
田原坂本道正面 薩の左側を横撃 田原坂本道正面 近歩2連1大1中の左翼 田原坂本道正面 薩の左側を横撃 田原坂本道正面 近歩2連1大1中の援兵	近歩2連1大1中 ⁽²⁰⁾ 近歩2連1大3中 ⁽²⁰⁾ 別働狙撃1小 近歩1連1大4中	豊岡台地中央部 一帯 調査地 公園北半部 公園南半部 資料館下 舟底遺跡	薩2大1小 薩2大2小 薩5大5小 薩6大4小 薩6大6小 薩6大7小	田原
二俣口 中久保 二俣口 右は長窪山の薩軍 二俣口前面 右は長窪山の薩軍 二俣口前面 右は長窪山の薩軍	近歩1連1大1中 ⁽²¹⁾ 近歩1連2大2中 大鎮9連1大3中 大鎮9連1大4中			
田原口本道 二俣村	砲兵隊 (東鎮豫砲1大右、 中央分隊) ⁽²²⁾	豊岡台地北部一帯 田原坂本道北側 一帯 豊岡台地中央部 一帯 豊岡台地南部一帯		
田原坂右翼 攻撃兵 田原坂右翼 攻撃兵 田原坂右翼 攻撃兵 田原坂右翼 攻撃兵 田原坂右翼 攻撃兵 田原坂右翼 攻撃兵	近歩1連2大1中 近歩1連2大4中 東鎮1連2大1中 東鎮1連2大3中 東鎮3連2大2中 東鎮3連2大4中半隊	豊岡台地南部一帯	薩6大2小 薩7大3小 ⁽²⁴⁾ 薩7大10小 ⁽²⁴⁾ 佐土原1小 佐土原2小 熊本3小 熊本7小 熊本10小 薩1大6小 薩4大6小	七本 轟村

3月8日

政府軍		推定戦闘地及び調査地	薩摩軍	
戦闘地等	部隊		部隊	戦闘地等
田原坂左側 二俣口より進撃、田原坂横面 (倉の台場)、中央台場(倉の 台場左翼)、小松山(宮山)	近歩1連1大4中 ⁽²⁵⁾	豊岡台地北部一帯 調査地 北平古道 田原城跡・寺跡 熊野座神社 田原坂本道北側 一帯 調査地 みかん小屋周辺 本道二ノ坂 谷村計介碑 市有地(北) 市有地(南)	薩5大8小 薩2大1小 ⁽²⁹⁾	小松山(北手松山台場) 北手松山台場
田原坂正面 田原坂正面 田原坂 田原坂前面 長窪山に向かう	近歩1連2大4中 別働狙撃隊1、2、3小 熊鎮14連3大4中 ⁽²⁶⁾ 近歩1連2大2中	豊岡台地中央部 一帯 調査地 公園北半部 公園南半部 資料館下 舟底遺跡	薩1大6小 薩2大2小 薩4大7小 薩5大5小 薩6大4小 薩6大6小 薩6大7小 薩7大3小 薩7大10小	田原
二俣	砲兵隊 (東鎮豫砲1大) ⁽²⁷⁾	豊岡台地北部一帯 田原坂本道北側 一帯 豊岡台地中央部 一帯 豊岡台地南部一帯		
田原坂右翼 援隊 二俣より本道へ進む	大鎮8連2大3中	豊岡台地中央部 一帯 豊岡台地南部一帯		
田原坂正面 七本ノ原へ進軍 田原坂右翼 攻撃兵 田原坂右翼 攻撃兵 田原坂右翼 攻撃兵 田原坂右翼 攻撃兵 田原坂右翼 攻撃兵 田原坂右翼 攻撃兵 田原坂右翼 攻撃兵 田原坂右翼 攻撃兵 田原坂右翼 攻撃兵 田原坂右翼 守線兵 田原坂右翼 守線兵 田原坂右翼 守線兵 田原坂右翼 守線兵 田原坂右翼 守線兵 田原坂右翼 守線兵 田原坂右翼 守線兵 田原坂右翼 守線兵 田原坂右翼 応援兵	近歩1連2大3中 ⁽²⁸⁾ 近歩1連2大1中 近歩1連2大4中 近歩2連1大1中 東鎮1連2大1中 東鎮1連2大3中 東鎮3連1大3中 東鎮3連1大4中 東鎮3連2大2中 東鎮3連2大4中半隊 近歩1連3大1中 近歩2連1大2中 東鎮3連2大3中 熊鎮14連2大4中 熊鎮14連3大4中1半隊 近歩1連1大1小	豊岡台地南部一帯	薩6大2小 薩7大11小 佐土原1小 佐土原2小 熊本3小 薩4大6小	七本 轟村

文献調査

田原坂右翼 応援兵	熊鎮 14 連 2 大 2 中			
田原坂右翼 応援兵	熊鎮 14 連 2 大 4 中 1 小			
田原坂右翼 応援兵	熊鎮 14 連 3 大 2 中			
田原坂右翼 応援兵	熊鎮 14 連 3 大 4 中 1 小			

3 月 9 日

政府軍		推定戦闘地及び調査地	薩摩軍	
戦闘地等	部隊		部隊	戦闘地等
		豊岡台地北部一帯 調査地 北平古道 田原城跡・寺跡	薩 2 大 6 小 薩 6 大 4 小 薩 6 大 6 小	豊岡村守備 豊岡村守備のち春日村 豊岡村守備のち春日村
田原口より田原坂進撃 田原口より田原坂進撃 二俣口より田原坂へ進む 二俣口より田原坂へ進む 二俣口より田原坂攻撃 二俣口より田原坂攻撃 二俣口より田原坂攻撃 二俣口より田原坂攻撃 田原坂攻撃 田原坂攻撃 田原坂攻撃 田原坂攻撃 田原坂 近衛の戦線に加わる 田原坂	近歩 1 連 1 大 1 中 ⁽³⁰⁾ 近歩 1 連 1 大 3 中 ⁽³⁰⁾ 近歩 1 連 1 大 2 中 ⁽³⁰⁾ 近歩 1 連 1 大 4 中 ⁽³⁰⁾ 東鎮 1 連 2 大 1 中 東鎮 1 連 2 大 4 中 東鎮 3 連 1 大 2 中 東鎮 3 連 1 大 3 中 近歩 2 連 1 大 1 中 近歩 2 連 2 大 2 中 近歩 2 連 2 大 4 中 東鎮 1 連 1 大の 2 個中隊 熊鎮 14 連 2 大 3 中 ⁽³¹⁾ (大鎮) 工兵 2 大 1 分隊 ⁽³²⁾	田原坂本道北側一帯 調査地 みかん小屋周辺 本道二ノ坂 谷村計介碑 市有地(北) 市有地(南) 豊岡台地中央部一帯 調査地 公園北半部 公園南半部 資料館下 舟底遺跡	薩 2 大 1 小 薩 2 大 2 小 薩 4 大 7 小 薩 5 大 5 小 薩 6 大 7 小 薩 7 大 3 小 薩 7 大 10 小	田原
二俣	砲兵 1 分隊 (東鎮豫砲 1 大) ⁽³³⁾	豊岡台地北部一帯 田原坂本道北側一帯 豊岡台地中央部一帯 豊岡台地南部一帯		
二俣口 二俣口 轟の薩軍を攻撃 轟の薩軍を攻撃 轟の薩軍を攻撃	東鎮 1 連 2 大 3 中 東鎮 3 連 1 大 4 中 近歩 1 連 2 大 1 中 ⁽³⁴⁾ 大鎮 9 連 1 大 1 中 ⁽³⁴⁾ 大鎮 9 連 1 大 2 中 ⁽³⁴⁾	豊岡台地南部一帯	薩 6 大 2 小 薩 7 大 11 小 佐土原 1 小 佐土原 2 小 熊本 3 小 熊本 7 小 ⁽³⁵⁾ 薩 1 大 6 小 薩 2 大 1 小半隊 薩 2 大 2 小半隊 薩 4 大 6 小	七本 轟村

3 月 10 日

政府軍		推定戦闘地及び調査地	薩摩軍	
戦闘地等	部隊		部隊	戦闘地等
田原坂本道 田原坂本道	近歩 1 連 1 大 1 中 近歩 1 連 1 大 3 中	田原坂本道北側一帯		

		調査地 みかん小屋周辺 本道二ノ坂 谷村計介碑 市有地(北) 市有地(南)		
長窪村中央 長窪山 田原左側	近歩1連2大2中 ⁽³⁶⁾ 広鎮11連2大3中	豊岡台地中央部 一帯 調査地 公園北半部 公園南半部 資料館下 舟底遺跡	薩2大1小 薩2大2小 薩2大6小 薩4大7小 薩5大5小 薩6大6小 薩6大7小 薩7大3小 薩7大10小	田原
二俣	東鎮豫砲兵1大 (2小隊左分隊加わる) ⁽³⁷⁾	豊岡台地北部一帯 調査地 北平古道 田原城跡・寺跡 熊野座神社 田原坂本道北側 一帯 豊岡台地中央部 一帯 豊岡台地南部一帯		
立野山(立花木) 二俣前面田原右側 田原右翼	近歩1連1大4中 近歩1連2大1中	豊岡台地南部一帯	薩1大6小 薩6大2小 薩7大11小 佐土原1小 佐土原2小 熊本3小 薩4大6小	七本 轟村

3月11日

政府軍		推定戦闘地及び 調査地	薩摩軍	
戦闘地等	部隊		部隊	戦闘地等
田原坂本道 田原坂本道 田原坂本道 田原坂本道 田原坂本道 田原坂本道 田原坂本道	近歩1連1大1中 ⁽³⁸⁾ 近歩1連1大3中 ⁽³⁸⁾ 近歩2連1大の1個中隊 近歩2連の1個中隊 東鎮1連の2個中隊 広鎮11連3大4中 広鎮11連2大4中	田原坂本道北側 一帯 調査地 みかん小屋周辺 本道二ノ坂 谷村計介碑 市有地(北) 市有地(南)		
二俣口前面 田原中央 二俣口前面 田原中央 二俣口前面 田原中央	近歩1連1大2中 近歩1連2大1中 大鎮9連1大2中	豊岡台地中央部 一帯 調査地 公園北半部 公園南半部 資料館下 舟底遺跡	薩2大1小 薩2大2小 薩2大6小 薩4大7小 薩5大5小 薩6大6小 薩6大7小 薩7大10小	田原
長窪山	近歩1連2大2中			

田原坂 二俣 舟底村薩壘攻撃 二俣	(大鎮) 砲兵4大2小右分 隊1分隊 ⁽³⁹⁾ (大鎮) 砲兵4大2小 1分隊 ⁽³⁹⁾ 砲兵(東鎮豫砲1大) ⁽⁴⁰⁾	豊岡台地北部一帯 調査地 北平古道 田原城跡・寺跡 熊野座神社 田原坂本道北側 一帯 豊岡台地中央部 一帯 豊岡台地南部一帯		
立野山(立花木) 立野山(立花木) 立野山(立花木) 二俣口 二俣口 二俣口前面 七本ノ原台場 二俣口前面 右翼中央 二俣口 田原坂進撃 二俣右側横平山守線を出、 前面薩壘攻撃	近歩1連1大4中 選抜狙撃隊 広鎮11連2大3中 東鎮1連3大1中 東鎮1連3大2中 近歩1連2大3中 ⁽⁴¹⁾ 広鎮11連3大3中 熊鎮14連2大2中 ⁽⁴²⁾ 近歩1連2大4中	豊岡台地南部一帯	薩1大6小 薩3大4小 薩3大7小分隊 薩5大3小 薩5大4小 薩6大2小 薩7大3小 薩7大9小 薩7大11小 佐土原1小 佐土原2小 熊本3小 熊本7小 薩4大6小	七本 轟村から七本応援

3月12日

政府軍		推定戦闘地及び 調査地	薩摩軍	
戦闘地等	部隊		部隊	戦闘地等
田原坂本道 田原坂本道	近歩1連1大1中 ⁽⁴³⁾ 近歩1連1大3中 ⁽⁴³⁾	田原坂本道北側 一帯 調査地 みかん小屋周辺 本道二ノ坂 谷村計介碑 市有地(北) 市有地(南)		
二俣の前面左翼 二俣の前面左翼	広鎮11連2大3中 東鎮1連1大1中	豊岡台地中央部 一帯 調査地 公園北半部 公園南半部 資料館下 舟底遺跡	薩2大1小 薩2大2小 薩2大6小 薩4大7小 薩5大4小 薩5大5小 薩6大6小 薩6大7小 薩7大3小 薩7大10小	田原
田原坂本道 二俣 二俣	砲兵4大2小の半分 砲兵4大2小の半分 東鎮予砲兵1大	豊岡台地北部一帯 調査地 北平古道 田原城跡・寺跡		

		熊野座神社 田原坂本道北側 一帯 豊岡台地中央部 一帯 豊岡台地南部一帯		
立野山(立花木) 立野山(立花木) 橘木(立花木) 七本/原台場 二俣口前面 二俣口右翼	近歩1連1大4中 近歩1連2大3中2分隊 熊鎮14連3大3中 ⁽⁴⁴⁾ 近歩1連2大3中半隊 ⁽⁴⁵⁾ 近歩1連1大2中 工兵全隊	豊岡台地南部一帯	薩1大6小 薩6大2小 薩7大11小 佐土原1小 佐土原2小 熊本3小 熊本7小 ⁽⁴⁶⁾ 薩4大6小 ⁽⁴⁷⁾	七本 轟村

3月13日

政府軍		推定戦闘地及び 調査地	薩摩軍	
戦闘地等	部隊		部隊	戦闘地等
田原坂本道 田原坂本道 田原坂口	近歩1連1大1中 近歩1連1大3中 (大鎮)工兵2大1小 4分隊 ⁽⁴⁸⁾	豊岡台地北部一帯 調査地 北平古道 田原城跡・寺跡 熊野座神社 田原坂本道北側 一帯 調査地 みかん小屋周辺 本道二ノ坂 谷村計介碑 市有地(北) 市有地(南)	薩5大5小 薩2大2小左半隊 ⁽⁵²⁾	田原本道右翼 田原坂本道
橘木より田原坂に進む	熊鎮14連3大3中 ⁽⁴⁹⁾	豊岡台地中央部 一帯 調査地 公園北半部 公園南半部 資料館下 舟底遺跡	薩2大1小 薩2大6小 薩4大7小 薩5大5小 薩6大6小 薩6大7小 薩7大3小 薩7大10小 貴島2小 熊本1小	田原
田原坂本道 二俣村前面 二俣	砲兵4大2小の1分隊 砲兵4大2小の1分隊 東鎮豫砲兵1大 ⁽⁵⁰⁾	豊岡台地北部一帯 田原坂本道北側 一帯 豊岡台地中央部 一帯 豊岡台地南部一帯		
二俣口前面 二俣口前面 七本/原台場	近歩1連1大2中 広鎮11連2大3中 近歩1連2大3中 ⁽⁵¹⁾	豊岡台地南部一 帯	薩1大6小 薩2大2小半隊 薩6大2小	七本

			薩 5 大 4 小 薩 7 大 11 小 佐土原 1 小 佐土原 2 小 貴島 1 小 高鍋 1 小 高鍋 2 小 熊本 3 小	
			薩 3 大 4 小	轟村

3月14日

政府軍		推定戦闘地及び調査地	薩摩軍	
戦闘地等	部隊		部隊	戦闘地等
田原坂本道 田原坂本道 田原坂台場	近歩 1 連 1 大 1 中 ⁽⁵³⁾ 近歩 1 連 1 大 4 中 ⁽⁵⁴⁾	田原坂本道北側 一帯 調査地 みかん小屋周辺 本道二ノ坂 谷村計介碑 市有地(北) 市有地(南)	薩 5 大 5 小 左半隊	田原本道応援から、田原坂上へ進む
二俣より田原坂に進む 長窪村中央 長窪村前面 舟底村山腹の塁 守線	熊鎮 14 連 3 大 2 中 近歩 1 連 2 大 2 中 ⁽⁵⁵⁾ 近歩 1 連 2 大 3 中 大鎮 8 連 3 大 1 中	豊岡台地中央部 一帯 調査地 公園北半部 公園南半部 資料館下 舟底遺跡	薩 2 大 1 小 薩 2 大 2 小 薩 2 大 6 小 薩 4 大 7 小 薩 5 大 5 小 薩 6 大 6 小 薩 6 大 7 小 薩 7 大 3 小 薩 7 大 10 小	田原
二俣村 二俣村	砲兵 4 大 2 小 東鎮予砲兵 1 大	豊岡台地北部一帯 田原坂本道北側 一帯 豊岡台地中央部 一帯 豊岡台地南部一帯		
二俣口 二俣長窪間の水車場近傍より、 1 小隊轟村に対する山腹に 散兵、1 小隊は山麓 七本口 本道を横断 七本口 本道を横断 七本口 本道を横断 二俣口 薩塁中央 二俣口 正面 二俣口 右翼の薩塁にせまる 二俣口 右側に出る 二俣口	近歩 1 連 1 大 2 中 ⁽⁵⁶⁾ 近歩 1 連 2 大 2 中 ⁽⁵⁵⁾ 大鎮 8 連 3 大 2 中 ⁽⁵⁷⁾ 大鎮 8 連 3 大 4 中 ⁽⁵⁷⁾ 熊鎮 14 連 2 大 4 中 ⁽⁵⁸⁾ 警視抜刀隊 東鎮 1 連 1 中 東鎮 1 連 2 中 広鎮 11 連 2 大 3 中の 1 半隊 熊鎮 14 連 3 大 1 中	豊岡台地南部一帯	薩 1 大 6 小 薩 1 大 7 小 薩 2 大 2 小 ⁽⁵⁹⁾ 薩 5 大 4 小 薩 6 大 2 小 薩 7 大 4 小 薩 7 大 9 小 ⁽⁵⁹⁾ 薩 7 大 10 小 薩 7 大 11 小 佐土原 1 小 佐土原 2 小 貴島 1 小	七本 七本柿木台場

二俣口	工兵隊		貴島 2 小 ⁽⁵⁹⁾	
			貴島 3 小 ⁽⁵⁹⁾	
			貴島 4 小 ⁽⁵⁹⁾	
			貴島 5 小 ⁽⁵⁹⁾	
			貴島付属砲隊 ⁽⁵⁹⁾	
			高鍋隊 1 小	
			高鍋隊 2 小	
			熊本 1 小半隊 ⁽⁶⁰⁾	
			熊本 3 小	
			熊本 7 小 ⁽⁶⁰⁾	
			熊本 9 小半隊 ⁽⁶⁰⁾	
			熊本 10 小 ⁽⁶⁰⁾	
			熊本 11 小 ⁽⁶⁰⁾	
			薩 3 大 4 小	轟村

3 月 15 日

政府軍		推定戦闘地及び 調査地	薩摩軍	
戦闘地等	部隊		部隊	戦闘地等
内北川より進み、宮ノ前で 激戦 ⁽⁶¹⁾		豊岡台地北部一帯 調査地 北平古道 田原城跡・寺跡 熊野座神社		抜刀にて宮ノ原より押寄 せ戦闘 ⁽⁶¹⁾
田原坂本道 田原坂本道	近歩 1 連 1 大 1 中 ⁽⁶²⁾ 近歩 1 連 1 大 4 中 ⁽⁶³⁾	田原坂本道北側 一帯 調査地 みかん小屋周辺 本道二ノ坂 谷村計介碑 市有地(北) 市有地(南)		
二俣前面 長窪村中央 長窪村前面 田原阜	近歩 1 連 2 大 2 中 ⁽⁶⁴⁾ 近歩 1 連 2 大 3 中 ⁽⁶⁵⁾	豊岡台地中央部 一帯 調査地 公園北半部 公園南半部 資料館下 舟底遺跡	薩 2 大 1 小 薩 2 大 2 小 薩 2 大 6 小 薩 4 大 6 小 ⁽⁶⁸⁾ 薩 4 大 7 小 薩 5 大 5 小 薩 6 大 6 小 薩 6 大 7 小 貴島 2 小	田原
田原坂本道 二俣村 二俣村	砲 4 大 2 小隊の 1 分隊 砲 4 大 2 小 東鎮予砲 1 大 ⁽⁶⁶⁾	豊岡台地北部一帯 田原坂本道北側 一帯 豊岡台地中央部 一帯 豊岡台地南部一帯		

二俣口 二俣 七本口	近歩1連1大2中 ⁽⁶⁷⁾ 熊鎮14連2大4中	豊岡台地南部一帯	薩1大6小 薩2大2小 ⁽⁶⁸⁾ 薩5大4小 薩6大2小 薩7大3小 ⁽⁶⁸⁾ 薩7大4小 ⁽⁶⁸⁾ 薩7大9小 ⁽⁶⁸⁾ 薩7大10小 ⁽⁶⁸⁾ 薩7大11小 貴島1小 貴島2小 ⁽⁶⁸⁾ 貴島3小 ⁽⁶⁸⁾ 貴島4小 ⁽⁶⁸⁾ 貴島5小 ⁽⁶⁸⁾ 貴島付属砲隊 ⁽⁶⁸⁾ 佐土原1小 佐土原2小 高鍋1小 高鍋2小 熊本1小半隊 ⁽⁶⁸⁾ 熊本3小 熊本9小半隊 ⁽⁶⁸⁾ 熊本10小 ⁽⁶⁸⁾ 熊本11小 ⁽⁶⁸⁾ 薩3大4小	七本 七本柿木台場 轟村
---------------	---------------------------------------	----------	--	--------------------

3月16日

政府軍		推定戦闘地及び 調査地	薩摩軍	
戦闘地等	部隊		部隊	戦闘地等
谷より進み、栗ノ木平に 進撃 ⁽⁶⁹⁾		豊岡台地北部一帯 調査地 北平古道 田原城跡・寺跡 熊野座神社		宮ノ原より押下し下射 ⁽⁶⁹⁾
田原坂本道第一線 田原坂本道第一線 田原坂本道第一線	近歩1連1大1中 近歩1連1大3中 近歩1連1大4中	田原坂本道北側 一帯 調査地 みかん小屋周辺 本道二ノ坂 谷村計介碑 市有地(北) 市有地(南)		
舟底村山腹 田原	大鎮8連3大1中 熊鎮14連3大3中 ⁽⁷⁰⁾	豊岡台地中央部 一帯 調査地 公園北半部 公園南半部 資料館下 舟底遺跡	薩2大1小 薩2大2小 薩2大6小 薩4大7小 薩5大5小 薩6大6小	田原

			薩 6 大 7 小 貴島 2 小	
田原口 二俣口	第 1、2 旅団砲隊 (東豫砲 1 大、砲兵 4 大 2 小)	豊岡台地北部一帯 田原坂本道北側一帯 豊岡台地中央部一帯 豊岡台地南部一帯		
二俣口前面左側第一線 二俣口前面中央の第一線 二俣口前面中央の第一線 二俣口前面長窪村中間第一線 二俣口前面右翼 田原阜 二俣口前面右翼 田原阜 二俣口前面右翼 田原阜 二俣口前面右翼 二俣口前面右翼 七本口	大鎮 10 連 2 大 1 中 近歩 1 連 1 大 2 中 近歩 1 連 2 大 1 中 近歩 1 連 2 大 3 中 大鎮 8 連 3 大 2 中 大鎮 8 連 3 大 4 中 広鎮 11 連 2 大 2 中 広鎮 11 連 2 大 3 中 大鎮 8 連 3 大 3 中 熊鎮 14 連 2 大 4 中	豊岡台地中央部一帯 豊岡台地南部一帯	薩 1 大 6 小 薩 1 大 8 小右半隊 薩 5 大 4 小 薩 6 大 2 小 薩 7 大 3 小 ⁽⁷¹⁾ 薩 7 大 10 小 ⁽⁷¹⁾ 薩 7 大 11 小 貴島 1 小 佐土原 1 小 佐土原 2 小 高鍋 1 小 高鍋 2 小 熊本 1 小右半隊 ⁽⁷²⁾ 熊本 3 小 熊本 7 小 薩 3 大 4 小	七本 轟村

3 月 17 日

政府軍		推定戦闘地及び調査地	薩摩軍	
戦闘地等	部隊		部隊	戦闘地等
田原坂本道 内 2 個中隊を前面に増加し、左に方向を転じ田原坂の背面を襲う	近歩 1 連 2 大 4 中 近歩 1 連 1 大 3 中 (援隊) 大鎮 8 連 3 大 3 中	豊岡台地北部一帯 調査地 北平古道 田原城跡・寺跡 熊野座神社 田原坂本道北側一帯 調査地 みかん小屋周辺 本道二ノ坂 谷村計介碑 市有地 (北) 市有地 (南)		
田原坂本道正面 山上に達し、塁で防戦 田原坂本道 田原坂本道 田原坂本道 田原坂本道 田原坂本道 田原坂本道	近歩 1 連 1 大 1 中 ⁽⁷³⁾ 近歩 1 連 1 大 3 中 警視抜刀隊 (川畑隊) 東鎮 3 連 3 大 1 中 熊鎮 14 連 3 大 1 中 熊鎮 14 連 3 大 4 中 近歩 1 連 1 大 4 中 ⁽⁷⁴⁾	田原坂本道北側一帯	薩 2 大 1 小 ⁽⁷⁶⁾ 薩 4 大 7 小 ⁽⁷⁶⁾	田原坂北手ノ松山 田原坂北手ノ松山

二俣口前面中央 守兵	近歩1連2大3中 ⁽⁸⁴⁾		
二俣口前面中央 守兵	大鎮8連3大2中		
二俣口前面中央 守兵	大鎮9連1大1中		
二俣口前面中央 守兵	大鎮9連3大2中		
二俣口前面 守兵	近歩1連1大2中		
二俣口前面 守兵	近歩1連2大1中		
二俣口前面 守兵	近歩1連2大4中		
二俣口前面 守兵	東鎮1連1大1中		
二俣口前面 守兵	東鎮1連1大2中		
二俣口前面 守兵	大鎮8連3大4中		
二俣口前面 守兵	大鎮9連2大2中		
二俣口前面 守兵	大鎮10連2大1中		
二俣口前面 守兵	広鎮11連2大3中		
二俣口前面 守兵	広鎮11連3大3中		

3月19日

政府軍		推定戦闘地及び 調査地	薩摩軍	
戦闘地等	部隊		部隊	戦闘地等
水本、谷、岡林、北平等にて数十度の戦争 ⁽⁷⁹⁾		豊岡台地北部一帯 調査地 北平古道 田原城跡・寺跡 熊野座神社		水本、谷、岡林、北平等にて数十度の戦争 ⁽⁷⁹⁾
田原坂本道	近歩1連1大4中	田原坂本道北側一帯 調査地 みかん小屋周辺 本道二ノ坂 谷村計介碑 市有地(北) 市有地(南)		
舟底村	近歩1連1大1中	豊岡台地中央部一帯 調査地 公園北半部 公園南半部 資料館下 舟底遺跡	薩2大1小 薩2大2小 薩2大6小 薩4大7小 薩5大5小 薩6大6小 薩6大7小 薩7大3小 薩7大10小 貴島2小	田原
		豊岡台地南部一帯	薩1大6小 薩5大4小 薩6大2小 薩7大11小 貴島1小 佐土原1小 佐土原2小	七本

			高鍋 1 小	
			高鍋 2 小	
			薩 3 大 4 小	轟村

3月20日

政府軍		推定戦闘地及び調査地	薩摩軍	
戦闘地等	部隊		部隊	戦闘地等
田原坂口 田原坂口 田原坂口 田原坂口	近歩 1 連 1 大 3 中 広鎮 11 連 2 大 4 中 広鎮 11 連 3 大 1 中 広鎮 11 連 3 大 4 中	田原坂本道北側 一帯 調査地 みかん小屋周辺 本道二ノ坂 谷村計介碑 市有地(北) 市有地(南)	薩 1 大 8 小 右半隊 薩 2 大 1 小 薩 4 大 7 小 薩 5 大 1 小 薩 5 大 5 小 薩 6 大 2 小 薩 7 大 6 小	田原坂本道 田原坂本道 田原坂本道 田原坂本道 田原坂本道 田原坂本道 田原坂本道
舟底村から植木街道(本道)、 のち豊岡村駐屯	近歩 1 連 1 大 1 中 ⁽⁸⁷⁾	豊岡台地中央部 一帯 調査地 公園北半部 公園南半部 資料館下 舟底遺跡	薩 2 大 2 小 薩 2 大 6 小 薩 6 大 6 小 薩 6 大 7 小 薩 7 大 3 小 薩 7 大 10 小 貴島 2 小	田原
二俣 二俣、田原坂	東鎮豫砲 1 大 ⁽⁸⁸⁾ 砲兵 4 大 2 小 ⁽⁸⁹⁾	豊岡台地北部一帯 調査地 北平古道 田原城跡・寺跡 熊野座神社 田原坂本道北側 一帯 豊岡台地中央部 一帯 豊岡台地南部一帯		
前軍 先鋒 前軍 先鋒 前軍 先鋒 前軍 先鋒 前軍 先鋒 前軍 先鋒 前軍 先鋒 田原中央 援隊 左翼 左翼に付属 前軍 右翼 植木、向坂へ 七本/原台場、のち向坂へ 中軍 援隊 中軍 援隊 中軍 援隊 中軍 援隊 中軍 援隊 中軍 援隊	近歩 1 連 2 大 3 中 近歩 2 連 2 大 2 中 近歩 2 連 2 大 4 中 東鎮 3 連 3 大 2 中 大鎮 9 連 2 大 4 中 熊鎮 14 連 3 大 1 中 警視抜刀隊 1 小隊(川畑) 熊鎮 14 連 2 大 4 中 熊鎮 14 連の 1 個中隊 大鎮工兵 2 大 ⁽⁹⁰⁾ 近歩 1 連 1 大 2 中 ⁽⁹¹⁾ 近歩 1 連 2 大 3 中 ⁽⁹²⁾ 東鎮 1 連 1 大 3 中 東鎮 1 連 1 大 4 中 東鎮 1 連 3 大 2 中 大鎮 8 連 3 大 1 中 大鎮 8 連 3 大 3 中 大鎮 10 連 2 大 4 中		薩 1 大 6 小 薩 5 大 4 小 薩 7 大 11 小 貴島 1 小 佐土原 1 小 佐土原 2 小 高鍋 1 小 高鍋 2 小	七本
		豊岡台地南部一帯	薩 3 大 4 小	轟村

政府軍		推定戦闘地及び調査地	薩摩軍	
戦闘地等	部隊		部隊	戦闘地等
中軍 援隊	警視抜刀隊 1 小隊 (上田)			
中軍、のち植木へ	近歩 1 連 1 大 4 中 ⁽⁹³⁾			
後軍 予備	近歩 1 連 1 大 4 中			
後軍 予備	近歩 1 連 2 大 1 中			
後軍 予備	近歩 1 連 2 大 2 中			
後軍 予備	近歩 1 連 2 大 4 中			
後軍 予備	大鎮 8 連 2 大 3 中			
後軍 予備	大鎮 9 連 1 大 2 中			
後軍 予備	大鎮 10 連 2 大 1 中			
後軍 予備	熊鎮 14 連 3 大 3 中			
第 3 旅団の援軍	熊鎮 14 連 1 大の右半大隊			

註

- (1) 陸上自衛隊北熊本修親会『新編西南戦史』1979年、220頁
- (2) アジア歴史資料センター、Ref. C09083506100「戦闘景況 近衛歩兵第一聯隊第貳大隊第貳中隊」
- (3) アジア歴史資料センター、Ref. C09083513300「第一號戦闘略記 第一旅團東京鎮臺豫砲兵第一大隊」
- (4)、(5)、(6)、(7)、(9)、(12)、(18)、(19)、(23)、(24)、(29)、(47)、(59)、(68)、(71)、(76)、(77)、(85) 鈴木徳臣「田原坂三ノ坂における薩軍の配備状況」『熊本市の文化財第30集 田原坂Ⅲ』熊本市教育委員会 2013年、21～24頁、27頁
- (8)、(35)、(46)、(60)、(72)、(78)、(86) 宇野東風『硝煙弾雨 丁丑感舊録』丁丑感舊會、1928年、42～45頁、49～50頁、53頁
- (10)、(20)、(53)、(62)、(73)、(81)、(87) アジア歴史資料センター、Ref. C09083957400「近衛歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊戦闘日記」
- (11) アジア歴史資料センター、Ref. C09083513400、C09083513500「第一號戦闘略記 第一旅團東京鎮臺豫砲兵第一大隊」
- (13)、(52)、(57) 黒龍会本部『西南記傳 中巻一』黒龍会本部、1909年、573頁、588頁、591頁
- (14) アジア歴史資料センター、Ref. C09083957400「近衛歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊戦闘日記」。但し、『薩南血涙史』198頁では、「3月7日に田原八幡神社に火を放つ」となっている。
- (15)、(25)、(54)、(63)、(74)、(93) アジア歴史資料センター、Ref. C09083957600「戦闘景況 出征第二旅團近衛歩兵第一聯隊第一大隊第四中隊」
- (16) アジア歴史資料センター、Ref. C09083506300「戦闘景況 近衛歩兵第一聯隊第貳大隊第貳中隊」
- (17) アジア歴史資料センター、Ref. C09083513500「第一號戦闘略記 第一旅團東京鎮臺豫砲兵第一大隊」
- (21) 加治木常樹『薩南血涙史』青潮社、1998年、「第八節二侯の戦」「第四編第一章木留方面」203頁
- (22)、(27) アジア歴史資料センター、Ref. C09083513600「第一號戦闘略記 第一旅團東京鎮臺豫砲兵第一大隊」
- (26)、(31)、(42)、(44)、(49)、(58)、(70) 日本史籍協會『熊本鎮臺戦闘日記二』財団法人東京大學出版會、1977年復刻、77～79頁、83～85頁、91頁
- (28)、(41)、(45)、(51)、(65)、(75)、(84)、(92) アジア歴史資料センター、Ref. C09083963300「戦闘景況 近衛歩兵第一聯隊第二大隊第三中隊」
- (30)、(38)、(43)、(80) 全国近歩一会『明治十年西南ノ役 近衛歩兵第一聯隊第一大隊戦闘日誌』1933年複写、1997年復刻、7～8頁、10頁

- (32)、(48)、(82)、(90) アジア歴史資料センター、Ref. C09083971300「西国征討記（大阪鎮台工兵第2大隊3分隊）」
- (33)、(37)、(40) アジア歴史資料センター、Ref. C09083513700「第一號戦闘略記 第一旅團東京鎮臺豫砲兵第一大隊」
- (34) 加治木常樹『薩南血涙史』青潮社、1998年、「第十節田原と横平山の戦」207、208頁
- (36) アジア歴史資料センター、Ref. C09083506600「戦闘景況 近衛歩兵第一聯隊第貳大隊第貳中隊」
- (39)、(89) アジア歴史資料センター、Ref. C09084157900「(砲兵第四大隊第二小隊) 十年二月廿五日ヨリ同年六月廿二日ニ至ル全小隊日誌」
- (50) アジア歴史資料センター、Ref. C09083513800「第一號戦闘略記 第一旅團東京鎮臺豫砲兵第一大隊」
- (52)、(57) 黒龍会本部『西南記傳 中巻一』黒龍会本部、1909年、588頁、591頁
- (55)、(64) アジア歴史資料センター、Ref. C09083506800「戦闘景況 近衛歩兵第一聯隊第貳大隊第貳中隊」
- (56)、(67)、(91) アジア歴史資料センター、Ref. C09083957500「戦闘景況書 近衛歩兵第一聯隊第一大隊第二中隊」
- (61)、(69)、(79) 植木町『西南の役田原坂資料集 歴史のはざまに』1990年、「戦地景況輯録」9頁
- (66) アジア歴史資料センター、Ref. C09083513900「第一號戦闘略記 第一旅團東京鎮臺豫砲兵第一大隊」
- (83) 日本史籍協会『西南戦闘日注並附録二』財団法人東京大學出版會、1884年発行、1977年覆刻、126頁
- (88) アジア歴史資料センター、Ref. C09083514200「第一號戦闘略記 第一旅團東京鎮臺豫砲兵第一大隊」

e. 戦死者数調査（第26表、第27表）

(1) 集計

戦死者数調査は、田原坂の戦いの3月4日～20日の期間と豊岡台地の戦場を主対象に行った。このため、玉名高瀬や木葉方面、山鹿菊池、吉次峠や木留方面などは含まない。戦死者数調査ではその場所や日時で主な戦闘地や戦闘日が推定でき、採集・出土した小銃弾などの遺物との関連をうかがい知ることができる。また、d. 調査地周辺における両軍の戦闘状況の推定と連動させるため、政府軍は中隊単位での戦闘地毎の戦死者数も一覧とした。

政府軍 戦死者数調査は数が明確な政府軍を主とし、『靖国神社忠魂史』第一巻第四編西南の役靖国神社編纂1935（1990青潮社復刻出版）から算出した。死亡場所が病院の場合は『西南の役植木地区における官薩両軍戦死者名簿』植木町1990で確認した。記載が「田原」だけの場合は田原坂や豊岡など広範囲にまたがるため、戦没者墓碑銘のうち主に高瀬官軍墓地、高月官軍墓地、宇蘇浦官軍墓地、久留米山川招魂社の名簿で確認した。ただし、福岡陸軍病院、長崎陸軍病院、大阪陸軍病院関係資料等は未確認である。

田原坂の戦いにおける戦死者数は、既に先学によって明らかにされている。中村稲男「田原坂戦における日時別、地名別戦死者数」「官薩両軍の死者とその行方」『西南の役田原坂資料集歴史のはざまに』植木町、勇知之「田原坂の戦い」『データでみる西南戦争』等である。今回の集計では政府軍1,385名だが、中村は1,318名、墓地計1,317名、忠魂社数1,529名で、勇は1,687名とした。数に相違があるが、これは田原坂の戦いの範囲や期間、戦傷者の後日病院死亡数などの認識の差、算出基準の差のためである。

薩摩軍 薩摩軍の戦死者数は現状では詳細を明らかにしえないが、表には『西南の役植木地区における官薩両軍戦死者名簿』から記した。氏名が判明しているのは計385名で、政府軍に比して少ない。中村は植木町域での氏名判明数507名、一方では伝聞も含めて2,432名としており、大きな違いがある。近年では友野春久「西南戦争薩軍戦没者一覧（一～四）」『敬天愛人』第32号～35号2014～2017（公財）西郷南洲顕彰会に戦没者数8,333名（重複者等含）が挙げられ、うち戦没地判明4,076名、うち熊本2,635名、うち田原・田原坂542名である。戦没地が判明したうちの6割以上が熊本で、その2割以上が田原・田原坂である。戦没地判明全体なら田原・田原坂での戦死は13.3%になる。

今後は、明確な基準をもとに算出した両軍の戦死者数調査が、重要な研究課題となろう。

(2) 部隊と戦死場所

部隊 政府軍の戦死者は多い順に、大阪鎮台 29 個中隊（砲兵工兵騎兵等含、以下同）600 名、近衛 15 個中隊 357 名、東京鎮台 12 個中隊 155 名、広島鎮台 7 個中隊 115 名、熊本鎮台 11 個中隊 95 名、警視局 55 名である。概算すると 1 個中隊単位では、近衛 23.8 名、大阪鎮台 20.7 名、広島鎮台 16.4 名、東京鎮台 12.9 名、熊本鎮台 8.6 名となり、近衛の戦死者が最多で大阪鎮台がこれに次ぐ。田原坂戦の主力は近衛と大阪鎮台だったようだ。

近衛は第一連隊第一大隊第一中隊、同第三中隊、第二連隊第一大隊第一中隊が戦死者 50 人近くであり、

第 26 表 地名、部隊別 政府軍戦死者数 (1)

地名	部隊																小計	東鎮 1 連 1 大 3 中	東鎮 1 連 1 大 4 中	東鎮 1 連 3 大 1 中	東鎮 1 連 3 大 2 中	東鎮 1 連 3 大 3 中	東鎮 1 連 3 大 4 中	東鎮 3 連 3 大 2 中	東鎮 豫砲 1 大	東鎮 豫砲 1 大 1 小	東鎮 豫砲 3 大 1 小	東鎮 工 1 大 2 小	東鎮 騎 1 大	小計
	近歩 1 連 1 大 1 中	近歩 1 連 1 大 2 中	近歩 1 連 1 大 3 中	近歩 1 連 1 大 4 中	近歩 1 連 2 大 1 中	近歩 1 連 2 大 2 中	近歩 1 連 2 大 3 中	近歩 1 連 2 大 4 中	近歩 1 連 2 大	近歩 2 連 1 大 1 中	近歩 2 連 1 大 2 中	近歩 2 連 2 大 2 中	近歩 2 連 2 大 4 中	近工 1 小																
田原坂	43	14	42	5						45	7				156	7	3	11		5						1	1	1	1	30
田原	2		2	3		1			1	3					12		2	3	1	4								1		11
豊岡村																														
鈴麦村																														
舟底山											11				11															
立野山																														
橘木																														
瓶割坂																														
蜂別坂																														
七本																1														1
轟村																														
二俣・二俣口		21	3	20	15	36	24	31	1			17	8	2	178		4	7	14	3	1	32	1	2			4	1	69	
鉢割山																														
横平山																					23	16	1					4		44
計	45	35	47	28	15	36	25	31	1	1	48	18	17	8	2	357	8	9	21	15	35	17	33	1	3	1	10	2	155	

第 27 表 地名、日付別 戦死者数一覧 (政府軍)

地名	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	計
田原坂	30	4	65	137	35	50	45	7	13	17	56	16	36	511				
田原	4		5	15	7	12	9	5	1	7	5		12	82				
豊岡村	1	1	1											3				
鈴麦村	1						3	1				1		6				
舟底山	6		1	4	1						16			28				
立野山									1					1				
橘木										1	1			2				
瓶割坂				1										1				
蜂別坂										4				4				
七本										6		2	8	2	18			
轟村														1	1			
二俣口・二俣	4	15	8	4	49	16	49	12	157	35	40	75	84	548				
鉢割山										8				8				
横平山							9	1		160	2			172				
計	46	20	80	161	92	78	115	27	177	248	107	99	135	1,385				

※他に日付不明 12 名。(薩摩軍)

田原坂	14	3	22	16	11	25	7	69	23	3	42	40	8	23	38	4	6	354
七本	1				1				1		2	22	2	1		1		31
計	15	3	22	16	12	25	7	69	24	3	44	62	8	25	39	4	7	385

薩摩軍戦死者数は、『西南の役植木地区における官薩両軍戦死者名簿』『田原坂・植木の戦い薩軍関係戦死者名簿』をもとに作成した。

負傷者も入れると、『征西戦記稿』付録旅団編成表では第一連隊第一大隊 811 名 1 個中隊平均 203 名なので、約半数が田原坂本道付近の戦いの 17 日間で戦死傷者になったことになる。

大阪鎮台は第八連隊第三大隊第二中隊と同第四中隊が二俣・二俣口で、第九連隊第一大隊第二中隊と第二大隊第二中隊が田原坂本道付近の戦いで戦死者 50 名程度の大きな損害を出している。第八連隊第三大隊は 666 名 1 個中隊平均 167 名なので、6 割程度が戦死傷者になったことになる。また、大阪鎮台は横平山 171 名中 100 名を第九連隊と第十連隊が占める。

戦死場所 政府軍の戦死場所は豊岡台地北部の舟底山、田原坂、田原周辺が 630 名、南部の七本、二俣・二俣口周辺が 567 名と抜きんでており、この 2 か所が田原坂の戦いの主戦場であったことがわかる。

(2)

部隊	地名																				小計									
	大鎮 8 連 2 大 1 中	大鎮 8 連 2 大 2 中	大鎮 8 連 2 大 3 中	大鎮 8 連 2 大 4 中	大鎮 8 連 3 大 1 中	大鎮 8 連 3 大 2 中	大鎮 8 連 3 大 3 中	大鎮 8 連 3 大 4 中	大鎮 9 連 1 大 1 中	大鎮 9 連 1 大 2 中	大鎮 9 連 1 大 3 中	大鎮 9 連 1 大 4 中	大鎮 9 連 2 大 1 中	大鎮 9 連 2 大 2 中	大鎮 9 連 2 大 3 中	大鎮 9 連 2 大 4 中	大鎮 9 連 2 大 2 中	大鎮 9 連 3 大 1 中	大鎮 10 連 2 大 1 中	大鎮 10 連 2 大 2 中		大鎮 10 連 2 大 3 中	大鎮 10 連 2 大 4 中	大鎮 10 連 2 大 2 中	大鎮 砲 4 大 2 小	大鎮 砲 4 大 2 小	大鎮 砲 2 大 2 小	大鎮 工 2 大 2 中	大鎮 工 2 大 2 中	
田原坂	16		11		3				22	40	23	9	6	38	36	1	2					1	10		3	5	2	228		
田原	3			1					4	7	4	3	4	8			1						8					43		
豊岡村																														
鈴麦村																														
舟底山																			16					1				17		
立野山																														
橘木																														
瓶割坂														1														1		
蜂別坂																														
七本																														
轟村				1																								1		
二俣・二俣口		5	2	5		53	39	53				1	1						11	36			1		1		1	209		
鉢割山																														
横平山				2												35						40	24					101		
計	19	5	14	8	3	53	39	53	26	47	27	12	11	48	36	36	3	16	11	36	40	25	19	1	3	1	5	2	1	600

(3)

部隊	地名																				警視局	教導団歩 2 大 3 中	輜重部	小計	合計
	広鎮 11 連 1 大 3 中	広鎮 11 連 2 大 3 中	広鎮 11 連 2 大 4 中	広鎮 11 連 2 大 4 中	広鎮 11 連 3 大 1 中	広鎮 11 連 3 大 3 中	広鎮 11 連 3 大 4 中	小計	熊鎮 13 連 1 大 2 中	熊鎮 13 連 3 大 3 中	熊鎮 13 連 3 大 4 中	熊鎮 14 連 1 大 1 中	熊鎮 14 連 2 大 2 中	熊鎮 14 連 2 大 3 中	熊鎮 14 連 2 大 4 中	熊鎮 14 連 3 大 1 中	熊鎮 14 連 3 大 2 中	熊鎮 14 連 3 大 3 中	熊鎮 14 連 3 大 4 中	小計					
田原坂	1	20	7	1	10	1	13	53	1	1			6			11	2		3	24	16	1	3	20	511
田原		4	3	1	1	2	2	13								1				1	2			2	82
豊岡村													1		2					3					3
鈴麦村					2			2					3	1						4					6
舟底山																									28
立野山		1						1																	1
橘木																			2	2					2
瓶割坂																									1
蜂別坂																			4	4					4
七本											1			11						12	5			5	18
轟村																									1
二俣・二俣口		11				33	1	45			2	6	3	14		1	1	1	28	15		4	19	548	
鉢割山																			8	8					8
横平山					1		1					9								9	17			17	172
計	1	36	10	2	13	37	16	115	1	1	2	1	22	6	28	12	15	3	4	95	55	1	7	63	1,385

文献調査

2. 弾薬と銃砲

調査において、最も採集出土量が多い遺物は小銃弾であり、次いで薬莢、四斤砲弾片などが続く。武器の小銃や刀剣、大砲などは調査では確認されていない。これらの戦闘に直接かかわる遺物は、その場所で戦闘が行われた物的証拠であり、文献の記述と合わせて戦闘の具体的状況を教えてくれる。

本来的に言えば、田原坂出土小銃弾の多様性を理解するためには、田原坂の戦い以前の幕末維新时期までさかのぼって、西洋式銃砲や弾薬の国内製造や備蓄、民生品利用、輸入状況とそれらの供給状況を文献調査する必要がある。今回の報告をきっかけにして、こうした研究が進めば望外の幸であるが、これは今後の大きな課題でもある。

今回の銃弾と銃砲に関する文献調査は、最も採集出土量が多い小銃弾の中でも、主体をなすスナイドル銃弾を中心に行った。その全体像を知るための総論として、a. 『兵器沿革史』第一輯大正二年(1913)九月十九日陸軍省。戦闘現場での消費実態を知るための各論として、b. 『征西戦記稿』の巻二十四「弾薬消費」及び各巻本文中の小銃や弾薬についての記述、c. 『熊本鎮台戦闘日記付録』「第十四連隊戦闘日記」及び『乃木大将所蔵西南戦争従軍日誌第十四連隊第二大隊』、d. 「明治十年二月賊徒征討以来平定ニ至ル迄砲兵支廠兵器弾薬製造支給之景況」及び別冊「明治十一年三月明治十年中鹿児島征討ニ際シ兵器弾薬出納表砲兵支廠」。弾薬の貯蔵や製造、調達などについて知るための付論として、e. 各種記録類、国立公文書館アジア歴史資料センターの「陸軍省大日記」と「海軍省公文備考」。スナイドル銃弾の製造工程の詳細を知るための参考として、f. 『火工教程』第一篇、第二篇明治17年(1884)陸軍省を使用する。

これらは政府軍側の資料であり、薩摩軍側の資料までは踏み込めなかった。今後の課題としたい。

資料の抜粋引用にあたっては、カタカナはひらがなにしておき、句読点などを付し、数字は算用数字、かつ難読文字はひらがなにするなどにしてできるだけ読みやすくするよう努めた。

a. 『兵器沿革史』第一輯

『兵器沿革史』第一輯には、スナイドル銃や四斤砲の採用に至る経緯についての記述がある。いずれも、大きな要因として製作技術や素材、経費の問題が挙げられている。そもそも、西南戦争の両軍においてなぜスナイドル銃や四斤砲が主用されたのか、なぜ多種多様な銃砲類が使用されたのかを知ることは、幕末から明治時代前期の日本近代史、工業史、産業史、軍事史などの範囲にとどまらず、発掘現場でのこれらの出土遺物と遺物出土状況等から考えられる地域の歴史の理解に不可欠な事柄である。

なお、便に供するため当該事項記載頁を末に付した。

(1) 小銃

この時期の小銃に関しては、浅川道夫2013『明治維新と陸軍創設』「小火器の輸入と統一」に詳しく、「陸軍教育史明治別記第一巻稿」には、明治4年には既にスナイドル銃を採用する方針があり、その理由としてヨーロッパでの最良の銃ではないが、後装施条銃としては従来銃に比べて操作が簡便で、効力が大きく、かつ価格も比較的低廉なので国家経済に利し、時運の要求に応じて一時の急を補える小銃、と説明されているという。以下に緒言と第一編小銃のうちの必要部分を抜粋引用する。()は筆者付加

緒言 同年(明治五年)十月、陸軍卿は之に関する調査を雇教師首長佛国参謀マルクリー中佐に命じ、同中佐は更にルボン大尉をして武庫司在庫の小銃を調査せしめ、考定所見を具申せり。其の一節に曰く

日本政府は各国用うる小銃の便宜利害を察せずして、猥りに之を用うること、策の得たるものにあらず。宜く其の得失を熟慮考究したる後、軍用銃の種類を決定すべし。

軍用銃の種類決定せらるるまでは造兵司に備えある良形のものを用い、便宜兵士に之を附与するとき、費を省き差向き利益ある方便なり。日本に於ける軍用銃の考定は別種の手段方法を要す。3万乃至3万5千挺、みな各種の銃にして、その種類に応じその使用に習熟せしめざるべからず。因って今閣下へ左

の法則を建言す。

第一 機関不具の銃は悉く廃棄すべし。

第二 同種小数の小銃又は諸種混同取合せの銃は、形状同対をなさず且銃囊（弾薬筒のこと）の製作に於て甚だ便宜ならず。由て是等の銃は兵士に附与す可らず。

第三 同種にして員数多き銃を兵士に附与すべし。1 ヂビジョン（師団・鎮台）には同種類の銃を附与すべし。止を得ざることもあるも、1 ブリガード（旅団・鎮台）には必ず同対の銃を揃え、隊中各大隊は異なる銃を用うべからず。

第四 新に操練する兵士には、最も能く知れたる銃の形状良き品を授け与うべし。

右の方法に則り選択するときは下記 4 種の小銃を用うべし。

シャスポー銃 6 千挺、ドレイス銃 1 万 5 千挺、スナイドル銃 1, 500 挺、エンフィールド銃 1 万 2 千挺

シャスポー銃、ドレイス銃の 2 種は其の数、2 ヂビジョー（鎮台・師団）に附与するに足る。而して、スナイドル銃は僅々 1, 500 挺に過ぎずと雖、替ゆるにエンフィールド銃の銃尾を以てし元込たらしめば、堅固なる小銃を得べく、一挺の修覆は 3 円に過ぎずして、3 万 5 千ないし 4 万円の経費を以て事足るべし。之を同種新銃を購入するに比すれば頗る簡易にして、約 8 ヶ月乃至 10 ヶ月には之を全軍に支給するを得べし。

（中略）欧州各国に於て小銃製作の利害決定するまで右の簡易法を以て国を保護し費用を省き、右一定の上同種の銃を用うべし云々

当時、武庫司に蔵する小銃の種類は和銃を除き、実に 39 種以上の範式を有せしも、此の中に付前示 4 種の小銃を選定したるものにして首長意見に基き小銃一定の方針略など決定せられ、漸次口込銃を元込式に改造して歩兵隊に配当するの策を講じたり。

明治七年一月、各種兵の携帯銃器を定め之を令達す。是我国兵器の制式を定め以て軍用銃を採用する紀元と為すべし。同年十月、歩兵携帯銃種調査の報告に依り当時各隊の支給銃種を窺知することを得べし。

隊号と現下支給銃種 近衛歩兵第一連隊アルビニー銃、同第二連隊スナイドル銃・アルビニー銃、東京鎮台九番大隊エンフィールド銃、同第一大隊（熊本出張）スナイドル銃、東京鎮台第一連隊第一大隊スナイドル銃、同新潟営所エンフィールド銃、同宇都宮営所エンフィールド銃、同第十三大隊（熊本行）短スナイドル銃、教導団歩兵第一大隊シャスポー銃、仙台鎮台エンフィールド銃、同青森営所エンフィールド銃、名古屋鎮台エンフィールド銃、同金沢営所エンフィールド銃、大阪鎮台エンフィールド銃・ツンナール銃、広島鎮台エンフィールド銃、同高松営所エンフィールド銃、熊本鎮台エンフィールド銃・スナイドル銃

明治九年十二月、全国の歩工兵は総て元込銃を支給すべき見込を定めたり。（p8～11）

エンフィールド銃

実戦の経歴 明治十年西南の役に在っても、エンフィールド銃を携えたる部隊少なしとせず。就中、新撰旅団及別働第三旅団は全部同銃を携えり。而して田原坂、植木の激戦後スナイドル弾薬欠乏の状態に陥るや、三月三十日、山縣有朋参軍と鳥尾小彌太中将との間に其の補充方法に就いて問答あり。爾来内に在りては西郷従道、鳥尾の両中将善後の策を講じ、外に在りては弾薬節約法の訓示を発し、且熊本城連絡後は漸次後装銃を以てエンフィールド銃に交換し弾薬の欠乏に備えんとせり。

四月四日、その為 6 千挺を博多に輸送せり。その交換法は勉めて新到兵又は戦闘線に在りて比較的要務を帯びざる兵種より始め、近衛及戦闘線に在りて極めて要務ある兵隊はしばらく従前の後装銃を携帯せしむ。之が為其の隊名人員等各旅団将官より本営に報告することを達せり。

然るに幸い爾後は激戦の数を減じ、兵卒も亦弾薬の節約を心に銘じ、且英国及上海より洋製弾薬を購入するを得て、予定の如く兵器交換を為さずして止むを得たり。当役間、軍団砲廠部の受入たる補充エンフィールド銃は其の数 24, 480 挺にして、損廃交換数 2, 211 挺とす。即ち予備銃の約 1 割弱の損廃とす。之に依って他式に比し其の堅牢なるを證するに足るべし。（p41～42）

スナイドル銃

射撃諸元 弾薬筒は厚紙と銅、又はブリキ性の薄鉄を重ねたる円筒を銅製の底蓋に結合し、且之に抽筒鉄を付加し以て製作したる薬莢に弾丸装薬を包含したるものなり。薬莢の円筒部は瓦斯力に依って拡張自在なる如くす。初式の抽筒鉄は銅製なりしが、後之を鍍錫したる鉄鉄に代えたり。而して、底の中央に爆管を装じ中心撃発式となす。之をホクセル弾薬筒と称す。弾丸は鉛製蚤形円壩弾となし、円壩部に三條の圈溝を設け底部に円台孔を穿つ。その重量 31.1 g、装薬量 4.54 g、弾薬筒全量 47.2 g とす。之に依って初速 359 m を得べし。

明治十二年七月、本銃をスペンセル銃と共に試験し、命中、弾道、初速、浸透力等を実験せんことを戸山学校より伺出、弾薬 5 千発を下付し之を許可せられたるも、其の報告を闕く。(p92 ~ 93)

戦役の経歴 明治十年西南の役に在りては各種の小銃を用いたるも、スナイドル銃を以て戦闘上主要兵器となせり。出征部隊中、新撰旅団及別種部隊を除き各旅団は其の全部に至らざるも、殆んど本銃を備えざるはなし。

而して同役間屢激戦ありて弾薬の費消多く、就中田原坂の戦は特に激烈にして、一日平均 322, 150 発を消費しスナイドル弾薬欠乏の期に迫れり。而して其の製造を督励するも、1 日半にして漸く 5 万発を製造し得るに過ぎず。東京博多の間に蔵置するもの 1, 330 万発あるも、僅かに 2 週日を支るに過ぎず。即ち上海、香港、英国等に向って購求の策を取らざる可らざるに至れり。然るに其の在否未だ之を知る可らず。依って弾薬節約の為、エンフィールド銃を以て之に代換せんとの訓令ありしが、熊本城連絡後幸いにして激戦少く、且弾薬補充の途を得て此の訓令を全然実行せざるも差支なきを得たり。

此の役間、軍団砲廠の受入補充銃数は 8, 287 挺にして、損廃銃の交換銃数は 9, 194 挺を算せり。費消弾薬数 26, 145, 038 発なり。小銃の損廃数を其の補充銃数に比すれば実に過大なるの観あるも、該銃は全軍の総銃数中最多なるのみならず、或はアルビニー銃の破損交換に充てたるあり。故に他の元込銃に比し過大の損害数と認むるを得ざるべし。

而して、其の損傷銃は主として火門の破損せるもの、又之に因って撃鑿の作用の不良或いは撃鑿の打減を生ぜしもの、遊底の機能を失いしもの、銃剣脱落せしもの等とす。又使用上の不注意よりして銃身の割裂せしものあり。蓋し激戦の際、膛中に土砂の現在するを知らず、発射を為したるに因るもの多きが如し、左に掲ぐる村田少佐の申告は即ち其の證例と為すべし。(後略) (p96 ~ 98)

アルビニー銃

戦役の経歴 明治十年西南の別働第一、同第二旅団及熊本鎮台にアルビニー銃を支給し、始めて実戦に之を使用せり。右の旅団中之を使用したる歩兵は大阪歩兵第十連隊、広島歩兵第十一連隊の一部なるべし。明治九年十一月、該隊に同銃を至急分配したること及旅団編制に依って之を察知すべし。

此の役間に於ける本銃の結果は之を知る能わざれども、スナイドル銃の成果と大差なからんか。本器遊底の結構はスナイドル銃に比し、或いは脆弱なる処あるも、開閉の機能を損することは却って少しとす。軍団砲廠の受入補充数は総計 3, 845 挺にして損廃銃数 1, 782 挺を算せり。

此の器の処用弾薬筒はスナイドル銃のものに同きか故に、或いはスナイドル銃を以て、本器の交換補充を為したることあるべし。故に両者の間破損の真比率を知り難し。(p107 ~ 108)

スペンサー銃

戦役の経歴 明治十年西南の役、騎、砲、輜重兵のスペンサー銃を携帯したるものあるも、騎兵の戦闘として見るべきものなく其の効用を知ることを得ず。蓋し地形の関係上、臨時抜刀隊を編成し屢襲撃動作を為したるを以て本銃を用うべき場合なかりしならん。又砲兵及輜重兵は単に自衛の為之を携えしに過ぎざるが、故に素より本銃に就きて特に功験を知るの機なかりしなり。長スペンサー銃は別働第三旅団及別種某部隊に於て使用したるも、亦其の功験を記するものなし。本器の構造精巧なるを以て、恐らくは堅牢

ならざりしならん。

此の役間、軍団砲廠の受入補充銃数は短スペンサー銃 204 挺、長スペンサー銃 1,000 挺にして、甲者の損廢 135 挺、乙者の損廢 290 挺、両者の費消弾薬数 115,132 発なり。別働第三旅団（警視隊）は豊後口に於て、長スペンサー銃 600 挺を受領し、その費したる弾薬数 7,048 発、これを以て旅団中の最多となすべし。（p53～54）

レカルツ銃

戦役の経歴 レカルツ銃はまたリシャール銃と称え、口径 11 mm の元込銃にして遊底の範式は、アルビニー式に類し全長 1.04 m、重量 3.118 kg なる軽便の短銃なり。其の我国に輸入せられたるは、元治、慶應の交ならんか。慶應二年長州追討の役、長軍は追討軍中に就て之を鹵獲したることあり。爾来戊辰の役長州藩兵中、之を使用したるもの多かりしを以て見れば、此の銃は萩製造所に於て多く模造せられたるが如し。

西南の役、別働第二旅団中に尚之を使用したれども、其の実用甚少かりしが如し。即ち軍団砲廠の予備銃中、僅に 70 挺を備え破損 3 挺ありしのみ、本銃廢止の後多く一般希望者の為め射的用に払下げ世間之を称用せり。（p56）

スタール銃

戦役の経歴 スタール銃は米国製単発式の騎銃にして口径 12.5 mm、全長 0.96 m 余の軽銃なり。其の概形スペンサー銃に類するも紙製弾薬筒雷管打の式とす（又スペンサー弾薬筒と同種のものを用いたるものあり）。陸軍に購買したるは前記の如く明治七年なりしも、其の以前已に之を使用したり。（中略）以上の諸項を綜合するに、明治の初年諸藩中、已に之を採用したること明にして、我陸軍は一旦之を排斥したれども、明治九年来再び採用したるものなり。

而して、明治十年西南の役スペンサー銃と相半して之を使用し、熊本鎮台の如きは本銃を遊撃第四大隊に使用せしむ。然るに銃剣の装置なきが故に、之に代ゆべき日本刀の請求あり。蓋し本銃を歩兵隊に交付したるは其の当を得ざりしものなり。当役間、軍団砲廠に備えし補充用数の 375 挺、損廢交換数は 49 挺にして消費弾薬数は殆んどスペンサー銃に同じかりし。（p56～57）

(2) 火 砲

以下に緒言と第二編火砲のうち四斤山砲の必要部分を抜粋し、句読点などを付して引用する。

緒 言 小銃の事、如此決定したるも火砲の詮議如何なりしや。今其の状況を窺わんに従来野戦砲として佛蘭西ボード、米利堅ボードの類を使用したれども、此の滑腔砲の射程は小銃に及ばず。而して之に代換すべき砲種を在庫品中に求むれば、適切なるもの独り佛式四斤綫砲あるのみ。

此の火砲は旧幕時代已に製作を始め材料を具備し、且製作を続行しつつありて、庫内に 20 余門の備えあれば供給便にして速に武備完成の目的を達し得べきか。故に此の制式を選定し明治三年、四斤山砲を東京及大阪屯在の砲兵隊に配当せり。次年、御親兵砲兵隊の山砲を同式野砲を以て交換したり。是野戦砲制式決定の端緒となす。

当時、欧州に在りては口込、元込二種の砲制研究の時代にして克式元込砲（クルップ砲）の聲價漸く顕揚し、我国に於ても之を採用せんとの望みありしも、自国に於て鋼を製作する能わず、且、経費莫大を要し情勢之を許さず。然るに青銅製口込砲の製作は、其の工事に熟し原料も自国に於て豊なり。故に小銃決定の方針に準じ、当分の内佛式野山綫砲を以て野戦砲兵の編成に充てたるなり。（p11～12）

四斤山砲

射撃諸元 弾丸は榴弾、榴霰弾及霰弾を備え、榴弾及榴霰弾は翼式となす。即ち亜鉛製の筈翼 12 個（前翼 6、後翼 6）を具す。（p193）箱内収容弾薬 9 発の比は、榴弾 7、榴霰弾 1、霰弾 1 なり。但し、實際上、榴霰弾を多く支給せり。（p192）

尋常榴弾は炸薬 200 g を填充し、デマレー著発信管を装す。其の全備弾量を 4.035 kg と定む。装薬量は 300 g にして、フラネル地の薬囊に包入す。之に依て初速 237 m を得べし。

榴霰弾は其の外形、榴弾と少く異なり、頭部を搾迫せしめ一見酒瓶の観を為さしむ。弾子 80 個を包有し溶解したる硫黄を注入し、之を凝結せしむ。而して、弾頭部に於て空所を設け、此に炸薬 85 g を填充すべし。即ち前部炸薬なり。其の全備弾量 4.556 kg、信管は四時限を有する定時信管を制規となせしも其の効用可ならざりしを以て、紙管よりなる曳火信管を使用せり。紙管は厚紙製の管に導火薬を壓実したるものにして、鋏を以て之を所望の長さにより切り、亜鉛仮信管に打入するなり。紙管の全燃焼時は凡そ 9 秒を以て最大とせり。初速は 220 m となす。左に兩種弾丸の射撃諸元の略表を示さん。(表略)

霰弾は亜鉛の円筒内に 70 g を秤する鉄弾子 41 個を填充するものにして、全量を 4.725 kg となす。(p193 ~ 194)

右弾丸構造の説明は制式のものに就て之を記せり。然るに実際明治初年来、武庫に貯蔵したる弾丸は各種の製品ありて其の制、範式に違うもの多く之に修正を加えたること已に前示せるが如し。然れども員数多大の弾丸なりしかは全く其の改善を為し得ざりしならん。明治十二年五月、熊本鎮台砲兵射撃演習報告中の一節を掲げ其の参考に供せん。

- 一 四斤榴弾に新旧の 2 種あり。旧式の如きは弾質甚だ粗にして、又筈(翼)の高低差異甚多く、且つ新式より空弾の量 100 g 軽し。尋常の弾に較れば殆ど廢弾に属せり。依て弾力を減じ或は方向を失い偏飛すること多し。新式の品(新式の品とは制式弾なりと知るべし)は善良にして速かに害敢てなし。
- 一 四斤榴霰弾は旧式の 1 種にして弾質極めて粗悪なり。弾中に炸薬管あるものは其管中入る所の炸薬 35 g。定量より少なきを以て破裂せざるの憂あり。故に其管を穿ち 85 g を装填し破裂の力を与えしむ。また、小弾の種類に数種あり、尖弾、円弾及楕円弾を装して定式の品稀なり(彼の売局に於て製造する品なり)。故に弾量に従て差違あり、発射の際、甚しきに至ては弾、膛口にて粉碎すること屢なり。就中、山砲に最も多し。之れ遊隙の少なきより、弾筈の高低差異ありて線條に適合せざる原因なり。其数全数の三分の一余なり。
- 一 霰弾は 1 種にして其製、甚だ粗悪なり。
- 一 摩擦管は旧式の 1 種にして其製粗悪なるか、不発の数最も多し。
- 一 火薬は合式火薬に比較すれば、其力凡そ三分の一を減ず、廢薬に属せり。然れども弾の飛走に至りては前條に述るが如く、気候不順、砲及弾の有害によって定距離を算することを得ず。

各鎮台の砲兵射撃報告、大同小異なり。右は貯蔵弾薬新陳交換の目的を以て旧製品を演習用に充てたる結果なるべしと雖、明治元年の前後に於ける兵器製作の状態を知り得べきなり。(p195 ~ 197)

戦役の経歴 十年西南の役起るに際し、砲兵隊は未だ規定の編成を完備せざりしと雖、野砲兵 4 個大隊、山砲兵 6 個大隊を有せり。而して、出征に当て野砲兵は皆山砲編成に改め之を分合し、各旅団に配当したり。次に其の略表を示さん。

第一旅団・砲兵 1 小隊と 1 分隊・砲数 8 門、第二旅団・砲兵 1 小隊・砲数 6 門、第三旅団・砲兵 2 小隊と 2 分隊・砲数 16 門、第四旅団・砲兵 1 小隊・砲数 6 門、別働第一旅団・砲兵 1 小隊と 1 分隊・砲数 8 門、別働第二旅団・砲兵 2 小隊・砲数 12 門、熊本鎮台・砲兵 2 小隊と 2 分隊・砲数 16 門

上砲兵の配当一様ならざるは編成の未完、又は行動区域の地形の関係に依りてならん。要するに戦列に在りしもの 12 小隊となす。各小隊は山砲 6 門を備るの制にして、合計 72 門を使用したるものと認るを得べし。然れども、実際人馬の不足より 4 門或は 3 門の小隊ありしなり。又某旅団の砲兵はブロードウエル山砲を使用し、或はカトリング砲、或はミトライユース、或はウキトール砲、アームストロング砲、または臼砲の類若干を混用したるあり。故に実際四斤山砲の数は推算の如くならざりしも、戦役間所用の火砲

中、其の多数を占めたるものなり。軍団砲廠部受入数、四斤山砲 45 門にして、破損交換数を 22 門となす。其の消費弾薬数は 62, 104 発なり。

此の役に在りては砲兵集団射撃の実施、未だ普ねからず。高熊山攻撃に当りて第三旅団の 8 門、別働第二旅団の 4 門 (内 2 門プロドウエル砲)、即ち 12 門を用いて大功を奏したり。これを集団射撃の一例とす。又霧島山麓の戦に、敵の左翼隊森林に抛り頑強なる抗抵をなして退かず。櫻井砲兵大尉、四斤山砲 4 門を放列に布き、榴霰弾を猛射したるに、敵忽にして敗退せり。

要するに、四斤山砲は此の戦に使用せられたる諸砲中の魁なりしと謂うべし。然れども弾丸不合のものありて腔中に停滞し、為に止むなく射撃を中止し、また著発信管の不発あるいは紙管秒数不足の為、遠距離射撃に適せざる等の訴えあり。而して、砲車の運搬は当時馬匹欠乏の為、専ら人力を以てせり。(p204 ~ 206)

叙上の略歴に依るも、四斤山砲は慶應の末年より青銅七珊半山砲の制定に至る迄、常に陸軍砲兵に在りて其の主砲となり大に其の効験を顕し、以て国家擁護の責を全うしたるものと謂うべし。

(註) 総て腔綫を施したる砲煩をライフル加農、旋條砲、施條砲、線條砲、綫砲等と記す、皆同物異名なり。即ち採用時代、又は各藩各個随意に斯く唱えたるものなり。本書中、引用書中に記する所は其の儘之を転載し、特に現今の名称に改めず、以下準之。(p206 ~ 207)

四斤野砲

射撃諸元 弾丸の構造総て四斤山砲のものと同じ。装薬量は 550 g にして、榴弾の初速は 343 m、又榴霰弾の初速は 319 m なり。左に主要諸元の概要を掲ぐ。(表略) (p215)

戦役の経歴 明治十年西南の役、野砲兵は殆ど皆山砲編成に改め、之を出征せしめたり。故に野戦に在りては四斤野砲を使用せず。然れども、軍団砲廠に備えたる同砲数は 9 門にして支給総数は 12 門を算せり。而して、弾薬 2, 350 発を備え、其の消費数は 3, 986 発なり。其の他、熊本籠城間の消費数を 2, 700 発となす。此の弾薬を消費したる団隊は第二旅団、第四旅団、別働第一旅団、熊本鎮台なり。是に由りて観れば四斤野砲の使用せられたるは、熊本籠城間および鹿児島城山攻囲の時たりとす。左に熊本籠城最初の時期に於ける本砲並他の火砲の配備を掲げん。(表略) (p222 ~ 223)

叙上の記事を総合するに四斤野砲は同役間、専ら攻守城用に供し野戦に使用せざりしこと明なり。実に運搬用具並馬匹の不足と地形険悪なるが為、蓋し止むを得ざりしならん。(p226)

b. 『征西戦記稿』

『征西戦記稿』巻二十四「弾薬消費」には田原坂の戦いの弾薬消費と戦い前後の弾薬調達などの経緯が簡潔に記されており、資料的価値は高い。同書中の「後装銃」、「後装銃弾薬」は凡例に「書中後装銃ト記スハ皆スナイトル銃ヲ斥ス、蓋シ當時ハスナイトル銃ヲ除クノ外復タ後膛銃アラサリシヲ以テナリ」とあるので「スナイドル銃」、「スナイドル銃弾薬」とし、「夜比耳銃」は「エンフィールド銃」と記した。

各巻本文中の小銃や弾薬については、主な記述を日付順に抽出して並べた。戦闘地域が異なるが、全体としての銃弾の消費や供給状況を知ることができる。

今回使用した資料は、新潮社発行『征西戦記稿』上巻と中巻で、便に供するため当該事項記載頁を末に付した。()は筆者付加。

(1) 『征西戦記稿』巻二十四 「弾薬消費」中巻

回顧すれば開戦以来 50 余日にして、熊本の囲みやっと解けたり。其の間官軍劇戦、昼夜をとわず。したがって弾薬を費すこと又かぞえきれず。ことに田原坂の戦のごときは前後未曾有の大劇戦たるをもって、消費もつとも甚しとす。

砲廠の計算書によるに、田原坂の初戦より之を抜くに及ぶまで正面軍の費やす所、1 日平均およそ

322, 150 発。すなわち西郷従道、鳥尾中将に報ずるに、至急これを海外に購買するか、又は製造の数を増加すべきをもってし、各旅団へは弾薬を浪費すべからざる旨を諭す。是に至って再び大久保、伊藤両参議及び鳥尾中将に報じて、それを見極め処理を促し、又村田経芳少佐を大坂に遣り之を鳥尾に謀らしむ。

四月二十三日、西郷中将より報あり。曰く、砲兵本廠にてスナイドル銃弾薬一日半に 500 万発 (5 万発の誤りか) を製造し、其の他各種小銃その数の 1, 000 挺以上なるものは悉く一挺に 800 発の弾薬を備えたり。又山野砲は弾薬共十分の準備あれば、この後の戦争数月間に及ぶもスナイドル銃の外にも小銃弾薬の準備は整えりと。この一報、やや人意を強くす。而して、戦役の終るまで遂に弾薬の欠乏を致さざりしは、実に留守官勉励の功なりとす。

山縣参軍は、日頃大いに弾薬の欠乏を憂い、内には令を諸旅団に下し其の節用を諭し、外には其の事情を鳥尾中将に報じて増製を促し、四月一日、又特に村田少佐をして大阪に赴かしむ。時に、福岡木葉間に貯蓄せる弾数およそ 700 万発なり。

三月二十日

是より先き、三月二十日鳥尾中将より山縣参軍に贈れる書中に曰く、弾薬の準備既に僅々 10 日を支うべきの外なし。因って思うに、其の地正面軍不日一挙に進取を果たすか、また退いて南関を保たんか、この二途に出でざれば弾薬の後継甚だ保し難し。

参軍之に答えて曰く。現在の勢い、退いて守るの機に非ず、たとい敗るゝも進まざるを得ず。弾薬の事、知悉す。開戦以来、射撃を絶たず消費の夥多なる、又やむを得ざるなり。但し、一層厳に軍隊に令して、いたずらに浪費することを戒むべし。賊もまた弾薬に乏しく、既に長い年月を維持する勢いなきは、おおよそ之を認定せり。ゆえに我が兵の費やす所、今後多少の減少を見るべし。

しかれども、其の準備に至っては決して不足を致すべからず、宜しく急ぎ海外に購買し、又製造の数を増し十分多く足るよう充実すべしと。

三月二十四日

二十四日、諸旅団に告諭して曰く。開戦以来既に 1 か月を経過し費やす所の弾薬、日に数十万の多きに至る。しかるに平定の日、未だ予期すべからず、なお数百万の消耗を要するも又知るべからず。もし、今日のごとくにして改めずんば、たとい盛んに製造するも必ず其の費やす所を償う能わず。因って、あらかじめ将来の窮乏をおもんばかり、勉めて弾薬を無駄遣いせしめざるべし。其の戦闘の景況に応じ弾数を限りて兵卒に付し、1 弾をもおろそかにせしめざるを要す。

請う、諸将校、篤く此の旨を体して前途の目的を誤るなかれと。又各旅団長に内諭して曰く。熊本城連絡の後、徐々にスナイドル銃をもってエンフィールド銃に交換し、もって弾薬欠乏に備うべしと。この時、スナイドル銃弾薬は 1 日の製造 4 万発にして、既に貯蔵せる所の者は東京より博多に至るまでの間、合計 1, 330 万発に過ぎざりし。

三月三十一日

三十一日、又大久保、伊藤両参議及び鳥尾中将に報じて曰く。聞く、印度地方屯在の英国兵はスナイドル銃を携帯すと。其の弾薬を購買する能わざるか、且つ香港上海等へも着手ありたし。この地現在の弾薬僅かに 13、4 日を支うべきのみ、一に尽力を祈むと。

四月四日

四月四日、鳥尾中将より報あり。下の如し。

弾薬の事、逐次の諭示、了承。この事においては既に苦慮一ならず、種々手段をつくしたれど、在来貯蔵の分を射尽くせし上は、差し当たり後を継ぐ能わず。因って、今よりエンフィールド銃と徐々に交換の見込みをもって、既に博多へ向け 6 千挺余を送り出せり。請う、交換に着手あらんことを。昨夜、村田少佐より貴地の近況を審らかにす。なお、この地の事情は又、之をして伝えしむべし。

同村田少佐の報至る、下の如し。

スナイドル銃弾薬 400 万発、三十一日をもって福岡に送れり。なお、341 万発、神戸大阪に在り。まさに次船をもって送らんとす。又、東京に 100 万発、仙台青森の間におよそ 100 万発あり、日ならず大阪に至るべし。この他、現在日々製する所を除くの外、スナイドル銃弾薬なし。エンフィールド銃 3 千挺、弾薬 200 万発はまた次船に送るべし。又、エンフィールド銃 5 千挺、弾薬 100 万発、東京砲兵本廠に在り。また不日、大阪に至るべし。経芳は次船をもって此の弾薬と共に帰るべし。

四月五日

五日、山縣参軍は鳥尾中将より至れる昨日の書簡を添て、野津、大山、三好三少将に内達する下の如し。

弾薬之事、鳥尾中将の言、別紙の如し。右は従来しばしば告達せしごとく、なお勉めて其の製造を督促すれども到底製する所をもって費やす所を償うに足らず、やむを得ずエンフィールド銃に交換するに至らん。これ固より一般の兵気に関係、はなはだ少なからざる事なれども、また之を如何ともする能わず、貴官等よくこの意をまことに知り、諸将校へも厚く諭達あるべし云々。

四月六日

六日、諸旅団に告諭する。下の如し。

弾薬の浪費すべからざるは既に告諭せるがごときも、なお戦闘中往々これを途中で遺失するもの有りとう。これ或いは胴乱の製作その良を得ざるに因るなるべしといえども、よくよく賊徒の行為を聞くに、堡壘中に在ってなお弾薬を製造する者有りとう、之を遺失する者に比せば其の注意の何如、知るべきのみ。諸将校宜しく細心注意を加え、懇ろに部下に戒諭すべし。

四月九日

九日、野津、三好両少将の書、山縣参軍の許に至る。下の如し。

弾薬浪費の事、本日更に諸隊長を会し熟議査察するに、夜中撤兵線上に在って探撃に費やすもの其の数最もおびただし。しかれども是れ実際やむを得ざるの事なれば、目今エンフィールド銃若干を備え其の用に供すべし。請う、すみやかに 500 挺附属弾薬共を下付あらんことを。

副啓、本文の銃器は明日より分配せんと欲す。故に、もし此の地未だ是の品あらざれば、鹵獲せし所の者の砲廠部に在る有り。請う、之を賜へ。

四月十二日

十二日、総督よりエンフィールド銃交換の事を三旅団、第一第二第三に令す。其の文下の如し。

今後、エンフィールド銃の高瀬、南関両砲廠に到達する毎に其の銃数と弾数とを本営に報告し、各旅団戦務の緩急をはかり其の急ならざる処より交換を始むべし。其の旅団と隊名とを定むるは、本営と旅団将官との間に在るべし。

エンフィールド銃を携帯せしむるは勉めて新到兵、又は戦闘線に在って第一等ならざるの兵種より始むべし。其の兵種を区別と交換の時日を定むるは、各旅団将官の判断する所に在り。故に、砲廠部は某旅団交換の決定を待つて其の旅団担任の砲廠へ小銃弾薬を備えしめ、其の砲廠は旅団将官の命を待つて交換すべし。

近衛及び戦闘線に在って極めて要務あるの兵隊は、しばらく従前のスナイドル銃を携帯せしむ。故に其の隊名人員等、各旅団将官よりあらかじめ本営に報告すべし。

四月十三日

四月十三日、大阪より報あり。曰く、スナイドル銃弾薬 260 万発はおよそ 20 日以内、500 万発は 70 日以内、1,000 万発は 100 日以内に支那より長崎に達すべしと東京より報知あり。其の他各種現在の小銃、1 挺毎に弾薬 7、800 発、総計 15 万発はまさに準備せりと。

この日、大山、三好、野津三少将の書、山縣参軍の許に至る。其の大意下の如し。

小銃弾薬の事、十分注意して無駄遣いせざらしめ、戦闘攻撃兵を除くの外、総てエンフィールド銃を携帯せしむべし。因て請う、下士以下全員三分の一、即ち 1,700 人に供すべき銃器弾薬を至急下付あらんことを云々。

四月二十三日

二十三日、山縣参軍は是より先き弾薬準備の事を西郷中将に東京に問う、是の日その回答至る。下の如し。

弾薬買入の事、来論を了承す。右、かつて報せし所のスナイドル銃弾薬は、砲兵本廠より購求して支那地方より 260 万発およそ 2 週間内に長崎神戸へ、欧州より 500 万発およそ 7 旬間に横浜へ至るべし。この他大蔵省より購求せしもの、欧州より 300 万発およそ 100 日間に横浜に至ると云う。

且つ、其の内 260 万発は大蔵省より既に価銀を清了し、500 万発は砲兵本廠より、300 万発は大蔵省より各価銀を付しおわれり。故に、たとい欧州不時に大乱あるも違約あるべからず。

又目今、砲兵本廠においてスナイドル銃弾薬を毎 1 日半に必ず 500 万発 (5 万発の誤りか) を製造し、其の他小銃 1,000 挺以上なるものは、悉く每一挺に 800 万発 (800 発の誤りか) の弾薬を備え、又山砲は弾薬十分の準備あり。因って、今後戦争数月にわたるもスナイドル銃の外、更に小銃弾薬の準備あり、且つ砲兵本廠においては数百名の製造人、昼夜をとわず非常の勉励にて盛んに各種の弾薬を製造す。請う、幸いに軫懷をゆるやかにせよ。

四月二十四日

二十四日、西郷中将の書、又至る曰く。

スナイドル銃弾薬、砲廠より購求の 500 万発は四月八日締約の日より 7 旬間、即ち六月十六日迄に横浜に至るべく、又大蔵省よりの 10 万発は四月二十五日上海より乗せて送ると云えば、二十八日には長崎に達すべく、又 5 万発は四月中に長崎に達すべし。此の他砲兵本廠よりも、明後日 60 万発を神戸に輸送す云々。

五月九日

五月九日、山縣参軍、書をもって諸旅団に諭示する。下の如し。

弾薬の事、かつて申告の次第あり。なお熊本城連絡に至ればスナイドル銃をエンフィールド銃に交換すべき旨、第一、二、三、四旅団へは既に論決に及べり。しかるに熊本城連絡後、劇戦はただ一、二回、其の余は休戦に均しくして今日に至れり。

因って思う、梅天既に近し、勉めて剰余のスナイドル銃弾薬を用いしめんことを。しかれども、其の剰る所、固より多からず。且つ其の製造も費消を償うに足らず。この後、平定の日も又予期し難ければ、弾薬を愛惜すること旧に倍し、みだりに発射せざらしむべし。諸将校宜く厚くこれに注意し、各部下へ申諭すべし。

この諭示を得て、諸旅団各々其の部下に令する所あり。今ここに熊本鎮台谷少将の令を録し、もって其の余を例す。其の文下の如し。

五月十日

スナイドル銃弾薬の事はかつて告諭の旨あり、諸将校固より其の旨を体認し、既にあまねく部下に告諭し届からざる所なかるべしと信ず。しかれども、今又別紙参軍の申論あり、故に之を頒つ。もし中途にして交換を要するに至らば其の不利なる論を待たず、且つ大いに兵気を挫くべし。よくよく之を平日に注意せざれば、其の時に至って疑義百方するも遂に其の効を得べからず。宜しく常に一層の注意を加え、部下兵隊の氣勢を動かさずして、自然に愛惜の情を生ぜしめんことを要せよ云々。

五月十六日

五月十六日、西郷中将より山縣参軍に報知あり。其の文下の如し。

スナイドル銃弾薬、今後 30 日を経ては砲兵本廠において、日に 20 万発を製し得べし。この器械は工部省及び横浜において、昼夜励精してまさに製作せりと井田少将報知せり。

(2) 『征西戦記稿』各巻本文中の小銃や弾薬の記述

二月十九日

・小倉當所の餘に速に出征の途に上る可かりしが、其のエンフィールド銃を馬関なるスナイドル銃と交換を要するを以て、連日の風浪に阻せられ、日を曠くして其至るを待つ。然れども其の軍機を誤らんことを恐れ、遂に之を待つに違あらず、是日午後皆途に上る。(巻三正面軍初戦 三)

・各隊進行後、1時間にスナイドル銃馬関より至る。乃ち多数の夫卒を使役し第四中隊をして護送せしめ疾駆して荒生田及び黒崎に追、及び以てエンフィールド銃と交換す。不便なる前装銃のエンフィールド銃を棄て鋭利なる後装銃のスナイドル銃を得たり。将卒皆歡喜踊躍し、覺えず聲を發するに至れり。是隊は黒崎に宿す。(巻三正面軍初戦 三)

二月二十日

・第二大隊の第四中隊は午後1時小倉を發し、小区隊に区割し運搬する予備銃弾の護送に充て逐次に行進す。(巻三正面軍初戦 四)

二月二十一日

・石丸大尉の隊は黒崎を發し、銃器弾薬を護送すること昨日の如くして飯塚に至る。(巻三正面軍初戦四、五)

二月二十二日

・我が落後の兵来り、集る者7、8名若くは十余名あり、乃ち之を薄弱の戦線に増し、将校も皆傷者の銃を取り以て戦勢を助く。(巻三正面軍初戦 七)

・傷者及び弾薬糧食は順次に運搬し、餘物は之に火し烟焰の上るを期し戦線を左右に開て退去し、後拒を千本桜に置き防戦の地位を選定せんことを約し、榎木、山口両軍曹に命じ火を放たしむ。(巻三正面軍初戦 八)

二月二十三日

・少尉を本道に置き援隊増減の令を伝えしめ、軍曹をして糧食弾薬運搬の指揮を助けしむ。(巻四正面軍初戦 四)

・第二大隊の第四中隊は久留米を發し、途にして植木の戦況を聞き急に護送の銃弾を送れり。(巻四正面軍初戦 六)

・是日、第十四連隊は本部を木葉に置き、器械弾薬を此に移せり。故に南関復た一物なし。乃ち安藤中尉をして木葉に赴き弾薬を取り且つ明日の軍略を請わしむるに、木葉戦い方さに關なり。安藤因て其兵20余名を撰び、本道の戦線に増加し戦を助く、竟に弾薬を取るを得ず。(巻五正面軍初戦 二)

二月二十四日

・午前3時、銃器弾薬南関に至る。(巻四正面軍初戦 七)

・山鹿の兵は専ら守勢を取り、弾薬の到るを待つに安藤復命せざるを以て、二十四日昧爽、再び丹羽下副官を遣り之を促がす。時に十四連隊は木葉の戦利あらずして南関に退き、更に戦備を整うるの際にして僅に2万発の弾薬を受領するを得たり。(巻五正面軍初戦 二)

二月二十六日

・松木の残兵一小隊を以て、寺田村口に進撃す。時に弾薬欠乏兵員耗減し、疲労亦甚しきを以て大島少尉と相議し姑く進撃を停め、先ず弾薬を求めんとす。適々迫田大尉、羽入中尉自ら弾薬をもたらして来て、其隊に分賦して津田をして其兵を大島に還付し、寺田の左翼に赴かしむ。(巻四正面軍初戦 十九)

・時に弾薬已に竭き、四面皆敵を受け苦戦最も甚し。津田乃ち諸隊残兵の所在溝渠中に鼠伏する者を呼集し8、90名を得、方陣を作り弾薬の散落する者を拵拾せしむ。賊益々前後肉薄し銃丸霰集す。我兵且つ拾い且つ防ぎ、各々裁かに2、3弾を得、日已に暮るに会し銃に槍し木葉本道を指して突出し、近衛隊に遭遇し始て本隊に合するを得たり。(巻四正面軍初戦 二十)

・福岡駐屯の二中隊を久留米に分遣し以て之に備えしめ、之を野津、三好兩少將に報じ、深く注意し截後夜襲の虞に備えしめ、及び警戒を弾薬格納所並に其運搬に加えしめ、更に電報して急に丸亀營所の兵を差発せしめ又福原大佐に馬関に令じ一令の下直に船を大坂に遣り、準備の弾薬を馬関に転送するを予謀せしむ。(卷五正面軍初戦 六)

二月二十七日

・二十七日昨日以来、博多港風浪簸揚弾薬を揚陸するを得ず、乃ち福原に馬関に令し5千万発を陸送せしむ。(卷五正面軍初戦 七)

二月二十八日

・本軍は本道迫間川を経て、木葉より植木に進入す。前備より前哨傍哨を出し、後備に銃砲弾薬を具え輜重兵若干を附して護衛兵と為す。(卷四正面軍初戦 三十五)

三月二日

・弾薬は歩兵1名100発を携帯し、その第1予備は各220、30発とし輜重隊これを輸送す。更に10万発を第二予備とし之を船隈牙宮附砲廠部に置く。(卷六田原坂戦記 五)

三月四日

・是日、初は弾薬用量を概定して5、6万発と為せしに、後之を算すれば数10万発の多きを費すに至れり。其戦の劇烈なる知る可きなり。(卷六田原坂戦記 二十)

三月七日

・第十四連隊第一大隊右半大隊、岩村より南関に退き休養数日、初め同隊の久留米を發するや病兵若干を第二大隊に附従せしむる者、漸次快復或は該大隊に属して戦い、或は弾薬を護送して山鹿口に来り。(卷七田原坂戦記 十三)

・勅使一行は護衛兵一大隊半を率て長崎を發し、八日、鹿児島に至り弾薬製造所及び砲台を破却し、弾薬器械は之を大坂に移す。(卷十四勅使西下 二)

三月九日

・第八連隊の一中隊は是日高瀬より至り亦直ちに二俣に赴き、五郎山の賊壘を攻め銃撃日夜間断なく、弾薬為めに竭盡に至るも遂に之を抜くを得ず。(卷七田原坂戦記 二十)

三月十一日

・吉利大尉、衆を励し奮戦時を移す、既にして賊益々集る。我隊弾薬幾んと盡き、援隊至らず。(卷七田原坂戦記 二十七)

・近衛第一連隊第二大隊の第二中隊は其一小隊を長窪山の壘に留めて援隊とし、一小隊を以て前面の賊壘を攻め突入滾戦、賊兵潰走す。須臾、賊兵我左右を迂回し我後路を絶つ、我兵其隊を返して奮戦す。而して弾薬已に盡く。賊機に乘じ抜刀驀入、其鋒太だ鋭なり。我兵銃槍格闘、遂に支えず一條の血路を開き纔に後壘に入るを得たり。(卷七田原坂戦記 二十七)

三月十二日

・我兵丘阜に抛て之を劇射す、既にして其左軍の敗走するを聞き頗る狼狽、弾薬器具を棄てまた立岩村に走る。(卷八田原坂戦記 四)

三月十五日

・是より先き賊兵は常に弾薬を愛惜し敢て徒射せず、以て其の欠乏を防ぐ。大凡我10発して彼1発す。然るに本日の戦いは此に異なりて速射乱撃、復た弾薬を吝まらず其の必死を期したる知る可きなり。(卷八田原坂戦記二十五)

三月十八日

・地形太だ悪く賊の瞰射益々急、中尉以下死傷15名、弾薬もまた竭く。僅に死傷を携て旧線に退く。

(卷九田原坂戦記 八)

・該隊堅守屈せず、既にして弾薬に乏しく援兵も亦至らず遂に塁を棄て旧線に退く。(卷九田原坂戦記 九)

三月二十日

・賊の敗れ退くや工兵随、即植木に抛り鹿柴を樹て山鹿口を塞ぎ、塹壕を鑿ち防戦に便りす。而して賊の委棄する所の火薬数万弾、街中に山積せり。乃ち工兵をして其弾薬雑具を併せて之を一烟に付せしめ以て其念を絶つ、爆発の聲山に震す。(卷九田原坂戦記 二十一)

・向坂の軍孤立し輸送路阻し諸隊午餐を缺く、尋で弾薬亦将さに殫きんとす。乃ち諸隊互に相用い以て射撃に充つ。今井中佐、津田、津野両少佐と議して曰く「今、弾薬の未だ盡きざるに先だち、速に背後の賊を破り植木の軍と合わせざれば、後復た及ぶなけん」と、乃ち諸隊を勒し逡次却退せしむ。(卷九田原坂戦記 二十二)

・是日三浦少将又部下に諭告する次の如し。(抜粹)

- 一 凡そ戦地に在て銃器を破損することあれば、其原由の如何を論ぜず、戦線より退きて銃器の交換を請うを許さず。其人員は総て戦闘間の雑務に役せしめ、或は創傷人あるに及びて其銃を借り以て之を使用すべし。此法を乱るものは直に処分すべし。
- 一 弾薬支給の事は過日も達したる通り、各兵に 100 発を携帯せしむるの外、之を付与せず。因て必ず此数以内を以て一戦間の目的を達すべし。此餘支給を請う者の処分法等は、過日達したる通り心得べし。(卷十二山鹿戦記 六)

三月二十一日

・我左翼の哨線を襲う、我兵猛烈に火撃し其鋭鋒を挫く。軍曹以下死傷 5 名あり。時に我兵携帯の弾薬皆盡き予備を仰ぐに遑あらず。乃ち皆銃に剣して其突入を待つ。(卷十田原坂戦記 三)

三月二十五日

・是より先き戦を経る毎に、銃包若くは残殻の其地に遺落する者極て多く、皆軍用に供するに足れり。是に至て本営令あり、村民をして拵拾せしめ砲廠をして之を購買せしむ。(卷十田原坂戦記 三十四)

【参考】『従征日記』四月二日の項

是より先、散遺したる兵器弾薬を收拾し官に納むる者、左の償金を給与するの令を人民に布告したり、一令の後、陸続官に納むる者日に一日より多し。是の日其の收拾の額を聞くに、弾薬 7 万発償金は百有余円に及べりと。

小銃 1 挺償金 20 銭、小銃弾薬 500 発同 50 銭、胴乱 1 個同 8 銭、剣 1 本同 4 銭、小銃弾薬箱 1 個同 6 銭、大砲弾薬箱 1 個同 10 銭、スナイドル空銃包 500 発同 6 銭、計開右の如し。

三月二十八日

・大に運搬の便に乏し、士官自ら弾薬を運搬す。弾薬も亦将に盡きんとす。而して援隊進む能わず。我兵苦戦し午後四時兵を収むと。(卷十田原坂戦記 四十五)

四月二日

・吉次越より還れる兵一小隊、吉次越の前に駐屯せる弾薬護衛の卒 5 名人夫 40 名許の処に休憩せしに、餘賊 3 名抜刀斫りし来るに因り之を轟撃したるにて、其賊は遁逃往く所を知らずと云う。(卷十七正面軍戦記 十二、十三)

四月八日

・是日、第一、二両旅団の死傷 288 名、一に曰く死者 42、傷者 249 と。弾薬を費す 549, 200 発、一に曰く 58 万発との多きに至る。(卷十七正面軍戦記 三十一)

四月十五日

・第一、二両旅団兵、二月二十六日開戦以来本日に至るまで 49 日間、砲兵第四大隊第二小隊発弾の数 5, 930 餘、又歩兵の費す所小銃弾一日平均 322, 150 発の多きに至る。其劇戦知る可きなり。(卷二十正面軍戦記 十二)